

仙台市文化財調査報告書第87集

仙台平野の遺跡群 V

—昭和60年度発掘調査報告書—

1986年3月

仙台市教育委員会

仙台平野の遺跡群 V 正誤表

頁	行	(誤)	(正)
P. 20	図版 1	昭和50年	昭和46年
P. 42	L. 27	暗褐色	暗褐色
P. 47	L. 14	敷石以面	敷石上面

3・4頁の表の最後に追加してください。

No.	遺跡名	立地	種別	年代
41	富沢館跡	自然堤防	城館跡	中世

仙台市文化財調査報告書第87集

仙台平野の遺跡群 V

—昭和60年度発掘調査報告書—

1986年3月

仙台市教育委員会

序 文

近年、文化や歴史的事項に関する市民の意識は、少しずつその高まりをみせてきており、新しい都市像を育むなかでそれ等の資源を積極的に取り込もうとする傾向が生まれようとしている息吹を感じます。

埋蔵文化財の発掘調査は、仙台城下町時代以前の歴史を解明するのに積極的に貢献する方法として、不可欠な手段といえますし、また徐々にではありますが、その大切さについても理解が深まりつつあることは大変意義深いことと考えます。

ここに報告する報文も、昭和60年度実施した発掘調査の成果の公開であります。この内容にも表われていますように、新しい史実として受けとめられるような事柄も顔をのぞかせています。こうした調査に関しましては、多くの市民の方々や有識者の御支援があつてのことと深く感謝を申し上げる次第です。文化財保護行政はどうしても市民のこうした理解があつてこそ成り立つものと考えます。今後の御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶といたします。

昭和61年3月

仙台市教育委員会
教育長 藤井 黎

例 言

1. 本書は、昭和60年度国庫補助事業の緊急遺跡範囲確認事業に伴う、「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。

2. 本書の作成にあたり、次のとおり分担した。

本文執筆……………結城慎一・木村浩二・渡辺 誠・長島榮一

遺構実測製図……………結城・渡辺

遺物実測製図……………神成清志・鈴木勝彦・糸谷明子・笹平克子

遺構写真……………結城・渡辺

遺物写真……………渡辺・神成・鈴木・糸谷・笹平

遺物拓影……………赤井沢進・小林 充

遺物補修復元……………赤井沢・赤井沢千代子

編 集……………結城・木村・渡辺・長島

3. 本書中、郡山遺跡の調査報告は概報とし、詳細については、仙台市文化財調査報告書第86集「郡山遺跡Ⅱ～昭和60年度発掘調査概報～」の中にまとめ、その遺構略号は次のとおりである。

SA	材木列	SB	建物跡	SD	溝 跡
SI	竪穴住居跡	SK	土 壙	SX	その他

4. 本書中の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐原:1973)を使用した。

5. 地形図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1「仙台」、仙台市仙臺広域都市計画図2千5百分の1を使用した。

6. 航空写真は、仙台市都市計画課所蔵のもの(1/15,000,昭和32年10月12日、昭和46年10月21日撮影)を使用した。

7. 実測中の方角は磁北に統一しているが、これは真北に対し西偏7°である。

8. 本調査は、昭和60年5月に着手し、昭和61年3月31日に全ての事業を終了した。

目 次

序 文 例 言

I. 調査計画と実績	1
II. 発掘調査報告	5
〔1〕 富沢水田遺跡	5
遺跡の位置と環境	
泉崎浦地区 鹿野地区 まとめ	
〔2〕 仙台東郊条里跡	23
1. 遺跡の位置と環境 2. 調査に至る経過 3. 調査概要 4. まとめ	
〔3〕 教塚古墳	28
1. 遺跡の位置と環境 2. 調査に至る経過 3. 基本層位 4. 発見遺構	
5. 出土遺物 6. まとめ	
〔4〕 大年寺惣門	37
1. はじめに 2. 調査に至る経過 3. 層位 4. 調査概要	
5. 出土遺物 6. まとめ	
〔5〕 陸奥国分尼寺跡	56
1. 遺跡の位置と環境 2. 調査に至る経過 3. 基本層位 4. 発見遺構	
5. 出土遺物 6. まとめ	
〔6〕 郡山遺跡	65
1. 調査概要	
(1) 第50次発掘調査 (2) 第52次発掘調査 (3) 第53次発掘調査	
(4) 第56次発掘調査 (5) 第57次発掘調査 (6) 第58次発掘調査	
(7) 第59次発掘調査	

I. 調査計画と実績

仙台市内には、現在432箇所を数える周知の埋蔵文化財包蔵地がある。これらは、私達の祖先が残した貴重な文化遺産であり、過去の人間の生活の証でもある。この文化財を保護し、市民生活の中で活用しながら、後世の人々に伝えていくことは、私達の責務と言えよう。この埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に関わる開発行為、家屋の建築の際には、文化財保護の規定により、発掘届・通知を提出することが義務づけられている。ここ数年、都市計画に基づく公共事業、民間開発業者による宅地化等により、届出件数は増加の一途をたどっており、昭和60年度は400件になろうとしている。このため、市内に分布する埋蔵文化財の中には、埋没の危機にさらされている遺跡も数多くある。

そこで、仙台市教育委員会では、上記の届・通知の一部について、昭和56年度から国の補助を受けて「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施し、市内の遺跡の範囲確認、性格究明を行ってきた。

本事業は今年度で5年目を迎えた。本年度は、6遺跡で13件の発掘調査を実施した。この内7件は、同国庫補助事業として発掘調査を実施している郡山遺跡に係るもので、二期官衙外郭南門や外郭北辺の一部を検出した。また、富沢水山遺跡、教塚占墳の範囲確認が成され、大年寺惣門の基礎事業についても、創建以降の変遷を捉えることができた。市内には、遺跡範囲が設定されているものの、その性格が不明な遺跡が数多くある。来年度以降、これらの遺跡についても積極的な取り組みを図っていく必要がある。

(渡辺 誠)

今年度の発掘調査計画と実績は下記の通りである。

1. 目的 仙台平野に分布する遺跡群にかかる個人の小規模な開発（個人住宅の建築等）に伴う発掘調査
2. 調査面積 1,000㎡
3. 調査期間 昭和60年5月9日～昭和60年12月28日
4. 調査体制
調査主体 仙台市教育委員会
調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係
(課長)阿部 達 (主幹)早坂春一 (係長)佐藤 隆
(主事)結城慎一・長島榮 (教諭)渡辺 誠
同課文化財管理係
(係長)佐藤政美 (主事)岩沢克輔・山口 宏
調査指導 郡山遺跡指導委員会(委員長 伊東信雄) 東北大学工学部教授 佐藤 巧

調査協力 曹洞宗国分尼寺住職 小枝仙源

調査・整理参加者 赤井沢きすい・赤井沢進・赤井沢千代子・赤井沢満・糸谷明子・大貫由美子・神成浩志・工藤系なよ・小林 充・西條裕子・笹平克子・菅井清子・菅ノ又三千代・鈴木勝彦・千葉利彦・千葉 一・寺田ユウ子・谷津妙子・山田貞子・村上令子・我妻美代子

第1表 発掘調査実績表

遺跡名	事項	所在地	申請者住所	申請者氏名	開発内容	対象面積	調査面積	調査期間
宮沢水田跡 (C-301)	泉崎浦 池	仙台市泉崎一丁目2-2他	仙台市土手内一丁目23-22	加藤登一郎	店舗兼住宅新築	600㎡	52㎡	昭和60年 5月9日～ 5月31日
	舊野地	泉野三丁目214-4	向山二丁目1-15	佐々木洋二	店舗兼住宅新築	211.2㎡	26㎡	6月3日 6月22日
仙台東郷桑屋跡 (C-421)		南小泉字伊藤塚敷下25-17	所在地に同じ	菅野 安清 菅野 浩樹	住宅新築	133.6㎡	10㎡	6月24日 6月26日
教塚古墳 (C-014)		泉崎一丁目32-5外	西多賀一丁目16-35	中子 勝雄	盛土行為	991㎡	75㎡	7月24日 8月7日
大年寺惣門 (A-022)		茂ヶ崎四丁目40-2地先	惣門解体・修復工事に伴う基礎事業確認調査			28㎡	28㎡	10月28日 11月15日
陸奥国分尼寺跡 (C-420)		白萩町309地内	国分尼寺墓域における遺構確認調査			44㎡	44㎡	11月19日 11月27日
郡山遺跡 (C-104)	第50次発掘調査	郡山一丁目195-1	郡山一丁目18-10	岩間 邦雄	店舗兼住宅新築	262.7㎡	12㎡	5月13日 5月14日
	第52次発掘調査	郡山五丁目214-2他	小田原二丁目5-21	菅野 博幸	住宅新築	681.6㎡	52㎡	6月10日 7月2日
	第53次発掘調査	郡山五丁目2-21	成田町70	千田 清	住宅新築	211.7㎡	21㎡	7月8日 7月12日
	第56次発掘調査	郡山五丁目2-22	所在地に同じ	嶋田 せき	住宅新築	225.6㎡	24㎡	9月26日 10月29日
	第57次発掘調査	郡山三丁目19他	四分町三丁目7-1	仙台市長 石井 亨	側溝布設工事	2,000㎡	200㎡	10月25日 12月28日
	第58次発掘調査	郡山五丁目152-5他	郡山五丁目12-14	佐藤 文雄	宅地造成	906㎡	90㎡	11月8日 11月29日
	第59次発掘調査	郡山三丁目8-1先	二日町一丁目1-1	仙台市水道事業管理課 佐々木忠夫	水道管埋設工事	190㎡	190㎡	11月15日 12月6日



No.	遺跡名	立地	類別	年代	No.	遺跡名	立地	類別	年代	No.	遺跡名	立地	類別	年代	No.	遺跡名	立地	類別	年代
1	寶河木田遺跡	陵寢遺跡	水田跡	明末、平安、中興	11	伊尹井遺跡	自然埋没	舊城跡	晉代、南齊	21	三神廟古墳群	陸	正	西漢	31	齊時城跡	自然埋没	陸	齊、南齊
2	仙舟東門島遺跡	陵寢遺跡	水田跡	南朝、平安	12	瓦反田古墳	自然埋没	陸	古墳	22	常流遺跡	陸	正	東晉	32	法華橋古墳	自然埋没	陸	齊、南齊
3	蘇埠古墳	陵寢遺跡	陸	古墳	13	天野田古墳群	自然埋没	陸	古墳	23	蕭町古墳	陸	正	南朝	33	建康城古墳	自然埋没	陸	古墳
4	大年寺佛門	瓦	佛跡	西晉	14	華日社古墳	自然埋没	陸	古墳	24	金陵沢古墳	陸	正	西漢	34	陸奥國分寺跡	自然埋没	陸	南朝、平安
5	陸奥國分府寺跡	自然埋没	佛跡	南朝、平安	15	三ノ塚古墳	自然埋没	陸	古墳	25	伊尹井古墳	陸	正	西漢	35	兜摩寺遺	自然埋没	陸	古墳
6	蘇埠遺跡	自然埋没	舊城跡	南朝、古墳、平安	16	鳥取塚古墳	自然埋没	陸	古墳	26	金剛八幡古墳	陸	正	西漢	36	崇禎寺種穴跡	陸	正	漢代、南朝
7	山口古墳	自然埋没	舊城跡	南朝、平安	17	宋家塚古墳	陸	正	西漢	27	西谷遺跡	陸	正	西漢	37	雲龍山種穴跡A	陸	正	漢代
8	下ノ内遺跡	自然埋没	舊城跡	南朝、平安	18	山田ノ内古墳群	陸	正	南朝	28	那白遺跡	陸	正	西漢	38	長安山種穴跡	陸	正	漢代、南朝
9	下ノ内遺跡	自然埋没	舊城跡	南朝、平安	19	上野遺跡	陸	正	南朝	29	北目城跡	陸	正	南朝	39	高平城遺跡	陸	正	南朝
10	穴辰田遺跡	自然埋没	舊城跡	南朝、平安	20	三神廟遺跡	陸	正	南朝	30	樹小倉遺跡	陸	正	南朝	40	仙舟東門	陸	正	西晉

第1圖 遺跡位置圖

Ⅱ 発掘調査報告

〔1〕富沢水田遺跡

遺跡の位置と環境

富沢水田遺跡（仙台市文化財登録番号C-301）は、国鉄長町駅の西約0.6～2.3km、仙台市長町七丁目、長町南一・三・四丁目、泉崎一・二丁目、鹿野三丁目、富沢一丁目にある。（第1図）。本遺跡は、沖積平野である「宮城野海岸平野」^(註1)に含まれる。「宮城野海岸平野」は地理的条件・成因・地質等から地形区分がなされ、仙台市南部の広瀬川と名取川の合流点付近の河間低地を「郡山低地」、広瀬川以北を「霞ノ月低地」、名取川以南を「名取低地」と呼称している。^(註2)本遺跡はこれらの低地の中で「郡山低地」西部部に位置し、名取川及び広瀬川が形成した後背湿地にその大半が立地する。標高は9～16m、面積は約800,000㎡を有する。

昭和56年4月から、仙台市体育館建設に伴う山口遺跡の調査が行われ、南半部の自然堤防上から奈良・平安時代の住居跡、北半部の后背湿地からはプラント・オパール分析に基づき平安時代の水田跡が検出された。^(註3)水田跡は、さらに北側の后背湿地に広がると考えられ、プラント・オパール分析では平安時代以前の水田跡の存在も予想された。本遺跡内では、同年度より仙台市高速鉄道関係遺跡の調査が行われていたが、昭和57年度になり后背湿地から中世さらには平安時代、弥生時代の水田跡も検出された。続く昭和58・59年度は、高速鉄道関係遺跡の他に、病院建設に伴う調査などで、中世、平安時代、弥生時代の水田跡が検出されるに及^(註5・6・7)び、本遺跡には中世から弥生時代にまで遡る水田跡が広く存在することが確実となったのである。

富沢水田遺跡は、近年、都市計画道路の整備、昭和62年度に開業が予定されている高速鉄道の建設に合わせ、宅地化・商業地化が急速に進んでいる。このため、年々発掘調査件数も増加の一途をたどっている。今年度の調査は、本書で報告している中部の泉崎浦地区、北西部の鹿野地区の他に、北部の中谷地区・南西部の富沢一丁目地区・中部の泉崎浦地区、北東部の鳥居原地区で行われた。^(註8)その結果、中世から弥生時代に遡る水田跡が発見され、鳥居原地区では遺跡範囲がさらに東側へ広がることが判明するなど、重層構造を成す水田跡の存在が広範囲にわたって確認されている。

周辺の遺跡を時代毎に概観すると、旧石器時代では山田上ノ台遺跡、北前遺跡があり、前期旧石器が出土している。縄文時代では下ノ内浦遺跡から早期の押型文土器が出土している他、後期の配石墓が検出されている。また、三神峯遺跡からは前期の住居跡が、下ノ内浦遺跡からは中期末葉の住居跡が、伊古田遺跡では後期の遺物包含層から大型の土偶などが出土している。

六反田遺跡では後期の石組み遺構が検出されている。弥生時代では下ノ内浦遺跡から土壇・竪穴遺構等が検出され、炭化米・石包丁・太梨蛤刃石斧・アメリカ式石鏃などが出土している。古墳時代では下ノ内遺跡、六反田遺跡などで住居跡が検出されている。また、埴輪をもつ裏町古墳の他、三神峯古墳群、砂押古墳、金洗沢古墳、兜塚古墳、金岡八幡古墳がある。本遺跡には教塚古墳があり、大野田地区には五反田古墳、春日社古墳、鳥居塚古墳、王ノ塚古墳、大野田古墳群等がある。奈良・平安時代では六反田遺跡、下ノ内遺跡、伊古田遺跡などで住居跡が検出されている。中世では富沢館跡、近世では茂ヶ崎城跡がある。

泉崎浦地区

1. 調査に至る経過

泉崎浦地区は富沢水田遺跡の中央部、仙台市泉崎一丁目2-2他にある(第2図)。この位置は国鉄長町駅の西南西約1.4km、泉崎浦遺跡の北100mである。昭和60年5月1日付で、仙台市土手内一丁目23-22、加藤養一郎氏より富沢水田遺跡の発掘届が提出された。申請地が富沢水田遺跡・泉崎浦地区に位置し、東側及び南側に隣接する地区の調査で、中世・平安時代及びそれ以前の水田跡等が検出されていたこと⁽¹¹⁾⁽¹²⁾から、遺跡の範囲確認を目的とした発掘調査を実施することで申請者の承諾を得、同年5月9日から調査を実施した。



第2図 調査区位置図

調査区は敷地内南側に「L」字形に設定した。盛土排土後は、調査区の北壁及び東壁際に土層観察と排水を兼ねたトレンチを幅約30cmで設けたが、一部に攪乱があり、実際の調査区は東西2×14.5m、南北2×12mの狭い範囲である。

2. 基本層位

10層確認された。第1層は旧水田耕作土とその床土から成る粘土質シルト層である。第2層は砂層から成り、調査区東側ほど厚く堆積している。第3層・4層・4'層は粘土層である。尚、第4層は1～5区、第4'層は7区にのみ分布する。第5層以下第10層までは未分解の植物遺体を多量に含む泥炭質粘土層である。各層位面は調査区東端ほど低く、西端との比高差は10～20cmを計る。

3. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、第3層・第5層・第7b層で水田跡を検出した。尚、調査区が狭いため水田跡一区画の面積・形状等は不明である。

(1) 第3層検出水田跡 (第3図-1)

第2層下面で第3層の盛り上がり認められたため精査を行ったところ、東西方向の畦畔2条、南北方向の畦畔3条を検出した。標高は10.8m前後である。調査区が東側ほど低いため、検出面は1～5区で第3b層上面、7区では第3a層上面である。

〔畦畔〕東西方向の畦畔は7区で2条検出した。方向は共にほぼN-90°-Eである。C・D-7区の畦畔は上端幅80～90cm、下端幅115～120cm、E・F-7区の畦畔は上端幅120cm以上、下端幅150cm以上を計る。断面形は共に扁平な台形状を呈する。作土との比高差は3～7cmを計る。

南北方向の畦畔はA・B-1・2区、B-4・5区、B・C-7区で各々1条ずつ検出した。A・B-1・2区の畦畔は方向がN-10°-E、上端幅70～90cm、下端幅115～120cm、B-4・5区では方向がN-25°-E、上端幅70～80cm、下端幅100～115cm、B・C-7区では方向がN-0°-20°-W、上端幅50～60cm、下端幅70～90cmを計る。断面形は共に台形状を呈する。作土との比高差は2～5cmを計る。畦畔は1～5区では第3b層、7区では第3a層を盛り上げて作られている。

〔作土〕1～5区では灰色の粘土層(第3b層)、7区では灰色の粘土層(第3a層)から成る。層厚は10～20cmを計る。層中及び層下面には酸化鉄を多量に含む。

〔足跡痕〕7区畦畔上及び作土上面で検出した(第3図-2)。足痕跡の形状には人足形と馬蹄形を呈するものがある。人足形を呈するものには指の痕跡も認められるものがあり、人足跡と考えられる。長さ16～20cm、幅10cmを計る。馬蹄形を呈するものは先が二股に分かれており、形状と大きさから牛足跡と考えられる。長さ10cm、幅8cmを計る。堆積土は1層で第2b層または第2c層から成る砂層である。

〔出土遺物〕 B-3区及びC-7区作土中より土師器片が4点出土しているが、いずれも小破片で図化したものは1点もない。

(2) 第5層検出水田跡 (第4図-2)

第4層下面で第5層の盛り上がりが見られたため精査を行ったところ、南北方向の畦畔1条を検出した。標高は10.5m前後である。調査区が東側ほど低いため、検出面は1-5区では第5層上面、7区では第4層上面である。

〔畦畔〕 南北方向の畦畔をB-3区で1条検出した。方向は $N-10^{\circ}-E$ で、ほぼ真北である。上端幅70-80cm、下端幅125-130cmを計る。畦畔は第5層を盛り上げて作られており、断面形は台形状を呈する。作土との比高差は0-10cmである。上面には灰白色火山灰が斑状に分布していた。

〔作土〕 1-5区では黒色の泥炭質粘土層 (第5層) から成り、層厚は12-30cmを計る。層中には第5層の一部、灰白色火山灰、未分解の植物遺体を斑状に含む。7区では暗灰黄色の泥炭質粘土層 (第4層) から成り、層厚は10-20cmを計る。層中には、灰白色火山灰、未分解の植物遺体を斑状に含む。尚、第4層直下には第5a層・5b層が明瞭に遺存している。

〔出土遺物〕 B-3区作土上面より土師器片、種子片、C-7区作土中より須恵器片が各1点出土しているが、いずれも小破片で図化したものは1点もない。

(3) 第7層検出水田跡 (第4図-1)

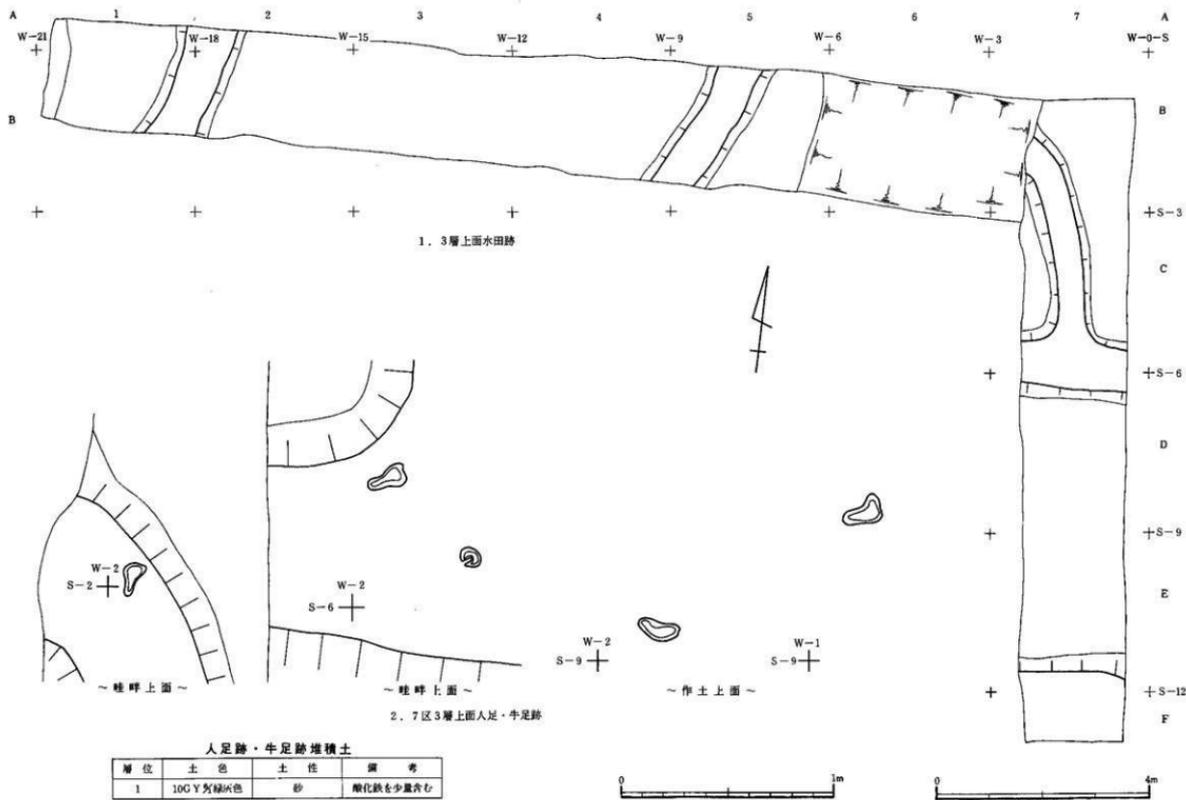
先行トレンチ壁面の観察から、第7層の盛り上がりが見られたため精査を行ったところ、東西方向の畦畔3条、南北方向の畦畔4条を検出した。標高は10.4-10.1m前後で、調査区東側ほど低い。

〔畦畔〕 東西方向の畦畔はB-2・3区、B-4・5区、E-7区で各々1条ずつ検出した。B-2・3区の畦畔は方向が $N-85^{\circ}-90^{\circ}-W$ 、上端幅12-20cm、下端幅40-50cm、B-4・5区では方向が $N-60^{\circ}-W$ 、上端幅30-50cm、下端幅60-75cm、E-7区では方向が $N-80^{\circ}-100^{\circ}-W$ 、上端幅35-40cm、下端幅60-70cmを計る。

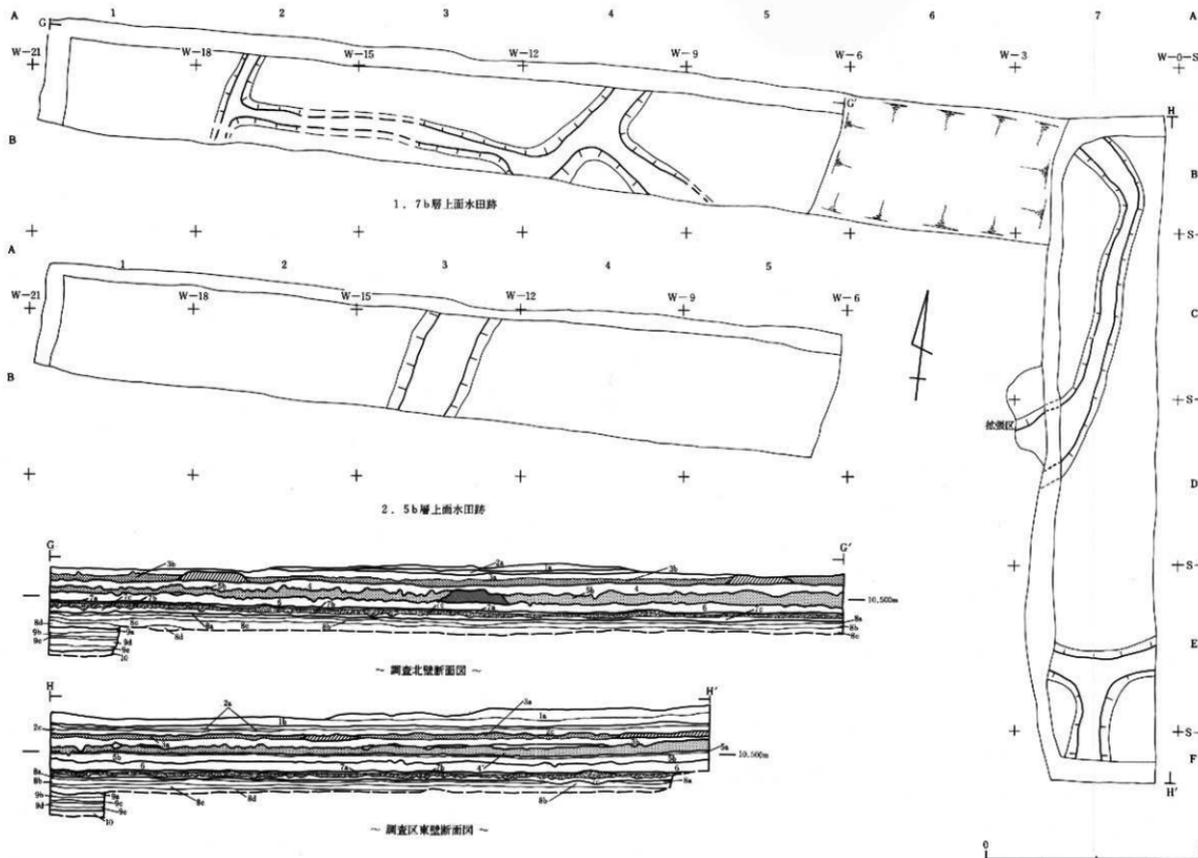
南北方向の畦畔はA・B-2区、B-4区、B・C・D-7区、E・F-7区で各々1条ずつ検出した。A・B-2区の畦畔は方向が $N-10^{\circ}-E$ 、上端幅20cm、下端幅40-50cm、B-4区では方向が $N-35^{\circ}-E$ 、上端幅20-80cm、下端幅40-120cm、E・F-7区では方向が $N-5^{\circ}-E$ 、上端幅33-50cm、下端幅70-90cmを計る。

畦畔は全て第7層を盛り上げて作られているが、断面形は非常に扁平な台形状を呈し、作土との比高差は1-5cmと小さい。

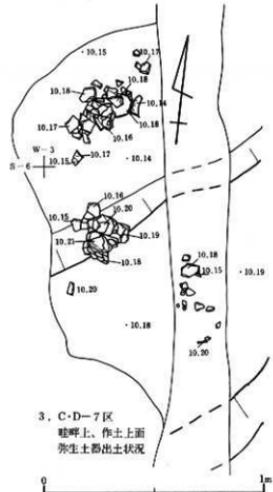
〔作土〕 オリーブ黒色の泥炭質粘土層 (第7層) から成り、層厚は0-14cmを計る。層中には細かな未分解の植物遺体を多量に含む。また風化凝灰岩粒と思われる岩片を少量含む。



第3図 3層上面水田跡 人足跡・牛足跡



第4図 5層上面・7b層上面水田跡・調査区断面図



3. C・D-7区
畦畔上、作土上面
赤生土露出状況

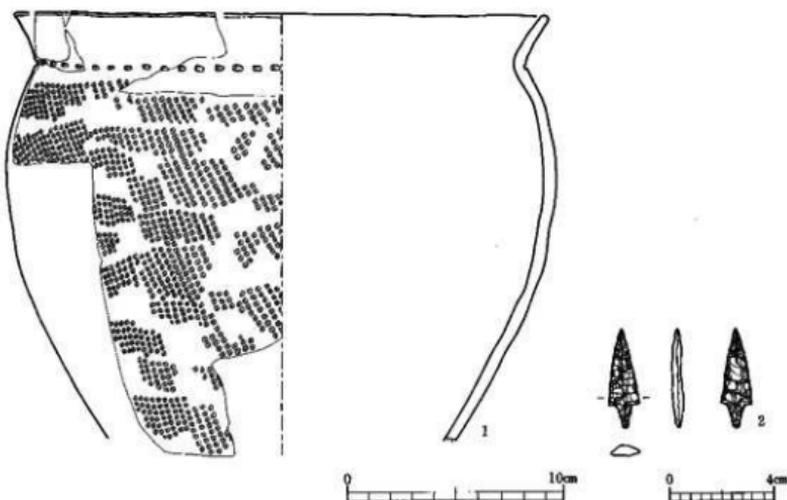
基本層位土層註記

層位	土 質	土 性	備 考
1a	2.5V列 暗オリーブ褐色	シルト質粘土	田跡跡上(赤田)
1b	2.5V列 暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む田跡跡中赤土
2a	10V列 黄褐色	砂	
2b	2.5C Y列 緑灰色	砂	酸化鉄を多量に含む
2c	10G Y列 緑灰色	砂	
3a	3 Y列 灰色	粘土	下部に酸化鉄を多量に含む
3b	2.5V列 灰色	粘土	酸化鉄を多量に含む下部に酸化鉄を多量に含む
4	10V列 黄色	粘土	1-2区にのみ分布
4'	2.5V列 緑灰黄色	粘土	灰白色土塊・赤分層植物体を含む7区にのみ分布
5a	10V R列 濃い黄褐色	粘土	赤分層植物体を多量に含む
5b	10V R列 黄褐色	粘土	1区にのみ分布(赤分層植物体多量)
6	2.5V列 灰黄色	粘土	赤分層植物体を多量に含む
7a	10V R列 黄色	粘土	赤分層植物体を多量に含む
7b	7.5V列 オリーブ褐色	粘土	赤分層植物体を多量に含む腐片を含む
7c	2.5V列 暗灰黄色	粘土	赤分層植物体を多量に含む
8	2.5V列 暗褐色	粘土	赤分層植物体を多量に含む
8a	2.5V列 黒褐色	粘土	赤分層植物体を多量に含む赤土層より暗い
8c	2.5V列 黒褐色	粘土	赤分層植物体を多量に含む赤土層より暗い
8d	2.5V列 黒褐色	粘土	赤分層植物体を多量に含む赤土層より暗い
8a'	2.5V列 暗灰黄色	粘土	赤分層植物体を多量に含むグライ層
8b	10V R列 暗灰色	粘土	赤分層植物体を多量に含むグライ層
8c	2.5V列 暗灰色	粘土	赤分層植物体を多量に含むグライ層
8d	2.5V列 暗灰色	粘土	赤分層植物体を多量に含むグライ層
8e	2.5V列 暗灰色	砂質粘土	赤分層植物体を多量に含むグライ層

〔出土遺物〕B-3区より石鏃が1点、C・D-7区より弥生土器がまとまって出土している（第4図-3）。

弥生土器B-1（第5図-1）：C・D-7区畦畔上及び作土上面より出土した。口縁部・体部の一部、底部を欠損している。地文のみの粗製の甕で、口縁部は強く外反し体部上半にふくらみをもつ。最大径は体部上半にある。口縁部から体部上端は無文で、明瞭な横ナデが見られる。以下は横位RLR縄文の地文となり、地文上の体部上端には斜位刺突状の押し引き連続刺突文が左方向から施されている。内面調整は口縁部、体部とも横位の粗いミガキが施されている。外面の調整・施文行程は、横位RLR縄文→横ナデ→押し引き連続刺突文の順である。尚、体部内外面に炭化物の付着、体部外面下半には二次加熱痕が認められる。

石鏃K-1（第5図-2）：B-3区作土上面より出土した。有茎の石鏃である。尖頭部は三^(註3)角形を呈し、先端部は鋭い。茎部及び尖頭部側縁には入念な調整刻離が加えられている。



番号	登録番号	種別	器形	出土遺構	出土層位	外面調整	内面調整	法量 (cm)				保存	調査	写真図版
								器高	口径	体径	器径			
1	B-1	弥生土器	甕	丸層水田跡	畦畔・作土上面	横位RLR縄文→横ナデ→押し引き連続刺突文	横位ミガキ	20.5	24.6	25.3		欠	内外面炭化物付着、二次加熱	図版9-1
2	K-1	石鏃 (有茎)		丸層水田跡	作土上面	調整刻離	石質	長さ	幅	厚さ		完		図版9-2
							珪質頁岩	3.3	1.15	0.4				

第5図 出土遺物実測図

鹿野地区

1. 調査に至る経過

鹿野地区は高沢水田遺跡の北西端、仙台市鹿野三丁目214-4にある（第6図）。この位置は国鉄長町駅の西約1.5kmである。昭和60年3月25日付で、仙台市向山二丁目1-15、佐々木洋二氏より高沢水田遺跡の発掘届が提出された。申請地が高沢水田遺跡・鹿野地区に位置し、これまで未調査の地区であったことなどから、遺跡の範囲確認を目的とした発掘調査を実施することで申請者の承諾を得、同年6月3日から調査を実施した。調査区は敷地内北側に東西2×10m、南北2×5mの「L」字形とし、盛土排土後は東壁及び南壁際に土層観察と排水を兼ねたトレンチを幅約30cmで設定した。

2. 基本層位

7層確認された。第1層は旧水田耕作土とその床土から成るシルト質粘土層である。第2層は粘土質シルト層、第3層・4層は粘土層である。第5層は砂層、第6層は未分解の植物遺体を含む泥炭質粘土層である。第7層は砂質粘土層でグライ化が著しい。

3. 発見遺構と出土遺物

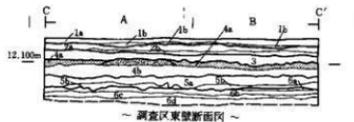
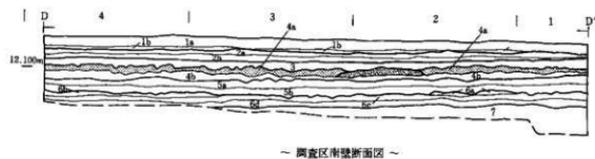
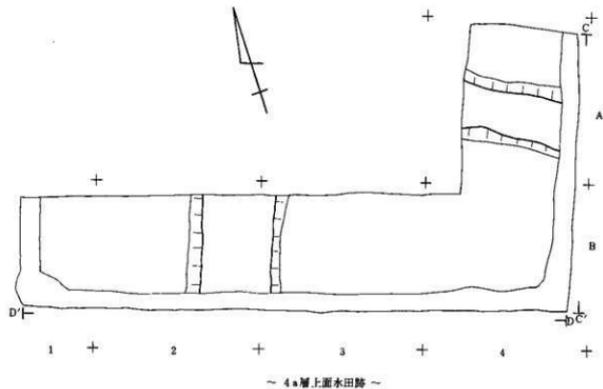
今回の調査では、第4a層で水田跡を検出した。尚、調査区が狭いため水田跡一区画の面積・形状等は不明である。

(1) 第4a層検出水田跡（第7図）

第3層下面で第4a層の盛り上がりを確認されたため精査を行ったところ、東西方向及び南北



第6図 調査区位置図



基本層位土層註記

層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1a	2.5Y黄褐色	シルト質粘土	足跡作土(赤面)	5a	2.5Y浅黄褐色	砂	礫化鉄を多量に含む
1b	2.5Y黄褐色	シルト質粘土	礫化鉄を多量に含む。田跡作土原土	5b	2.5Y浅黄褐色	砂	礫化鉄を多量に含む
2a	2.5Y黄褐色	粘土質シルト		6a	2.5Y黄褐色	粘土	未分解植物遺体を含む
2b	2.5Y黄褐色	粘土質シルト	礫化鉄を多量に含む	6b	2.5Y黄褐色	粘土	未分解植物遺体を含む
3	2.5Y黄褐色	粘土		6c	2.5Y黄褐色	粘土	未分解植物遺体を含む
4a	2.5Y浅黄褐色	粘土	灰白色大田跡を概状に含む	6d	2.5Y黄褐色	粘土	未分解植物遺体を含む
4b	2.5Y黄褐色	粘土		7	7.5GY明緑灰色	砂質粘土	グライ化が深い

第7図 4a層上面水田跡・調査区断面図

方向の畦畔を各々1条検出した。標高は12.1m前後である。

〔畦畔〕東西方向の畦畔はA-4区で検出した。方向はN-65°-W、上端幅70-90cm、下端幅110-120cmを計る。南北方向の畦畔はB-2・3区で検出した。方向はN-20°-E、上端幅130cm、下端幅165-180cmを計る。畦畔は第4a層を盛り上げて作られており、断面形は共に扁平な台形状を呈する。作土との比高差は0-10cmである。

〔作土〕浅黄色の粘土層(第4a層)から成り、層厚は6-18cmを計る。層中には灰白色火山灰を斑状に含む。下面に酸化鉄の集積等は認められない。

〔出土遺物〕B-3区作土中より土師器片、須恵器片が各2点出土しているが、いずれも小破片で燻化したものは1点もない。

ま と め

今回の調査は富沢水田遺跡の範囲確認を目的として実施した。調査面積等の制約があり、水田跡・区画の面積・形状等は不明であるが、泉崎浦・鹿野両地区で水田跡を検出し、本遺跡における水田遺構の広がりを確認することができた。

1. 泉崎浦地区：3時期の水田跡を検出した。

〔第3層検出水田跡〕

東西方向の畦畔2条、南北方向の畦畔3条を検出した。また、畦畔上及び作土上面では人足跡・牛足跡も検出した。作土中から土師器片が出土していることから、時期は平安時代以降と捉えておきたい。尚、下面に酸化鉄の集積が認められることから、この水田跡は乾田であったと考えられる。

〔第5b層検出水田跡〕

南北方向の畦畔を1条検出した。畦畔の方向はN-10°-Eで、ほぼ真北である。また、畦畔上及び作土中に灰白色火山灰が分布していること、作土中より土師器片、須恵器片が出土していることから、時期は平安時代と考えられる。尚、作土が泥炭質粘土層で、下面に酸化鉄の集積も認められないことから、この水田跡は湿田であったと考えられる。

〔第7b層検出水田跡〕

東西方向及び南北方向の畦畔を各々4条検出した。畦畔の方向は大別してN-5°-35°-EとN-60°-100°-Wの2方向であり、一定の規格性も窺える。また、作土が泥炭質粘土層で下面に酸化鉄の集積も認められないことから、この水田跡は湿田であったと考えられる。第7b層水田跡の時期決定の型式判断に有効な資料としては、C・D-7区出土の変形土器がある。この土器は、既述のように、(1)肩線部が強く外反し、最大径を体部上半にもち(2)体部上端に地文区画文の斜位刺突状の押し引き連続刺突文が施され(3)口縁部から体部上端にかけて明瞭な横ナ

デが認められるものである。これらの器形・施文の特徴から、この土器は弥生時代中期樹形甕式期^(註14・15)に比定されよう。従って、B-3区出土の石織も同時期のものであろう。以上の検討から、第7b層水田跡の時期は、弥生時代中期樹形甕式期と考えられる。

昭和57年度、本調査区の東側20m程の地点で高速鉄道関係遺跡・泉崎浦地区の調査が行われ、第15層上面で水田跡を検出している。当時は出土遺物がなかったことから、平安時代以前の水田跡と捉えられていた。今回の調査成果を検討したところ、この第15層水田跡は水田面の標高、層位の土色・土性、畦畔の規模・方向等が本調査区第7b層検出の水田跡と同一であることが判明した。従って、第15層水田跡の時期は弥生時代中期樹形甕式期と判断される。

2. 鹿野地区

〔第4a層検出水田跡〕

東西方向及び南北方向の畦畔を各々1条検出した。作土中に灰白色火山灰を含むこと、土師器片、須恵器片が出土していることから、時期は平安時代と考えられる。第3層・6層では畦畔等の遺構は検出されなかったが、水田跡を形成する層位の可能性もあり、隣接する地点での調査を待って検討を加えたい。

富沢水田遺跡における発掘調査は、今年度で4年目を迎えた。その結果、中世・平安時代から弥生時代に遡る水田跡が検出され、本遺跡には重層構造を成す水田跡が存在することは確実である。4年間の調査地点は20ヶ所以上を数え、さらに来年度以降も調査件数の増加が予想される。これまでの各調査地点の成果を一括して整理し、今後の資料とする必要がある。一方、弥生時代の水田経営と結びつく集落跡の存在は、今年度に至っても不明である。本遺跡周辺には、自然堤防・段丘・丘陵といった集落の立地条件を十分に満たす地形が存在しており、今後は弥生時代集落跡の検出にも重点を置く必要もあろう。これらを来年度以降の課題としたい。

(渡辺 誠)

註・参考文献

- 註1. 地学団体研究会「新版 仙台の地学～仙台支部編～」1980
- 註2. 経済企画庁「地形・表層地質・土壌学 仙台」1967
- 註3. 仙台市教育委員会「山口遺跡Ⅱ発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書第61集』1984・2
- 註4. 仙台市教育委員会「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書第56集』1983・3 尚、時期決定は「同調査概報Ⅲ」の中で行われている。
- 註5. 仙台市教育委員会「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書第69集』1984・3
- 註6. 仙台市教育委員会「富沢水田遺跡～第一冊～泉崎前地区」『仙台市文化財調査報告書第67集』

1984・3

註7. 仙台市教育委員会「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ」『仙台市文化財調査報告書第82集』

1985・3

註8. 仙台市教育委員会「年報7」『仙台市文化財調査報告書第93集』1986・3

註9. 仙台市教育委員会「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅴ」『仙台市文化財調査報告書第89集』

1983・3

註10. 都市計画道路（長町一折立線）建設に伴う調査が行われた。報告書は次年度刊行の予定である。

註11. 註4に同じ。

註12. 「年報4」『仙台市文化財調査報告書第57集』1986・3

註13. 類例が、註5中の鳥居原地区で報告されている。

註14. 伊東信雄「宮城県史1」P.54、1957・3

註15. 伊藤玄三「日本の考古学Ⅲ・弥生時代」P.208～209 1981・7

註16. 註4～泉崎浦地区～、P.34～45

註17. 集落跡に関連する遺構としては、下ノ内遺跡で弥生時代後期(?)の土壇（註4 P.5～22）下ノ内浦遺跡で後期に比定される竪穴遺構、土壇、溝跡、ピットが検出されている（註5 P.5～22）だけである。



図版1 富沢地区航空写真(昭和50年撮影)

1. 泉崎浦地区 2. 鹿野地区

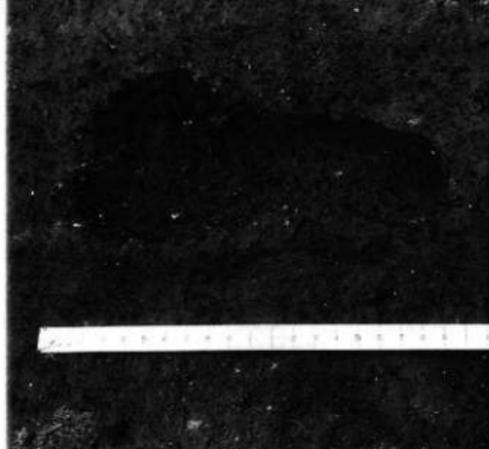
～ 泉崎浦地区 ～

図版2 7区3層水田跡(北より)

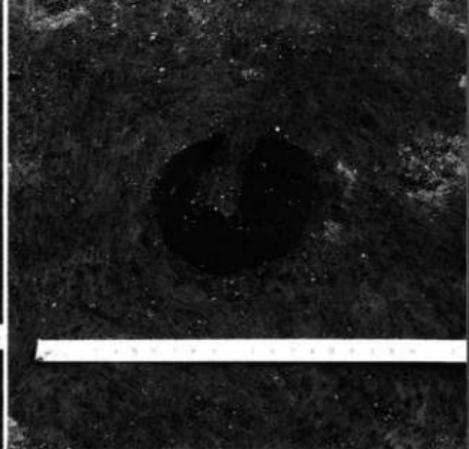


図版3 3区5層水田跡・畦畔検出状況(西より)





図版4 7区3層水田跡畦畔上人足跡(北西より)



図版5 7区3層水田跡畦畔上牛足跡(北東より)

図版6 7区7b層水田跡(北より)

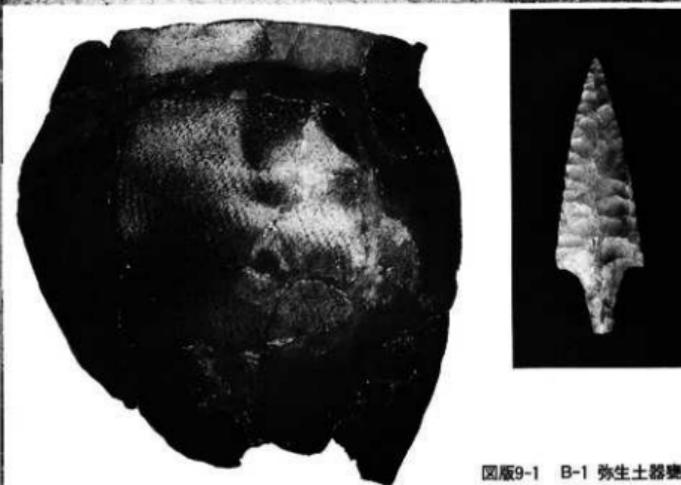


図版7 1~5区7b層水田跡(東より)



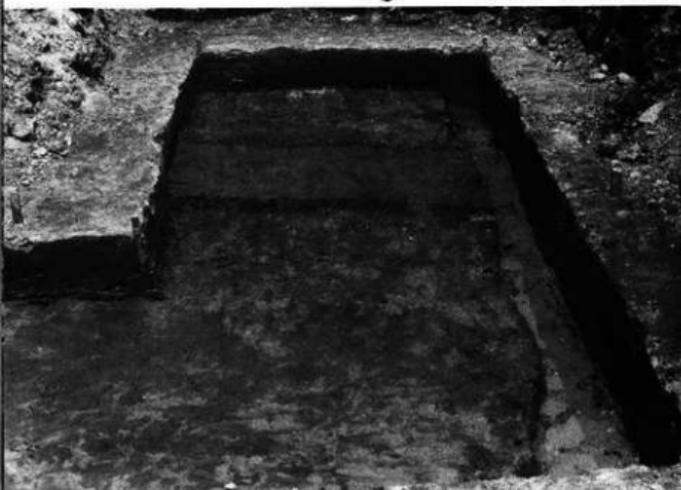


図版8 C・D-7区
7b層水田跡作土上面
弥生土器出土状況
(東より)



図版9-1 B-1 弥生土器甕

図版9-2 K-1 石鍬



～鹿野地区～

図版10 A-4区
4a層水田跡
(南より)

[2] 仙台東郊条里跡

1. 遺跡の位置と環境

仙台東郊条里跡(仙台市文化財登録番号C-421)は、国鉄仙台駅の南東約4.6km、仙台市南小泉字七曲、字伊藤屋敷下、字門田東、字蒲前、字梅ノ木、蒲町南にある(第1図)。本遺跡は沖積平野である「宮城野海岸平野」の中で「霞ノ日低地」^(註1)に含まれ、名取川の支流、広瀬川^(註2)によって形成された自然堤防、後背湿地上に立地する。標高は5～8m、面積は約780,000㎡である。

周辺の遺跡には、南小泉遺跡(弥生時代～近世)、遠見塚古墳・法領塚古墳(古墳時代)、陸奥国分寺跡・同尼寺跡(奈良時代)、若林城跡(古墳・平安・中・近世)などがあり、本遺跡一帯が弥生時代から続く古代の中心地域であったことが窺える。

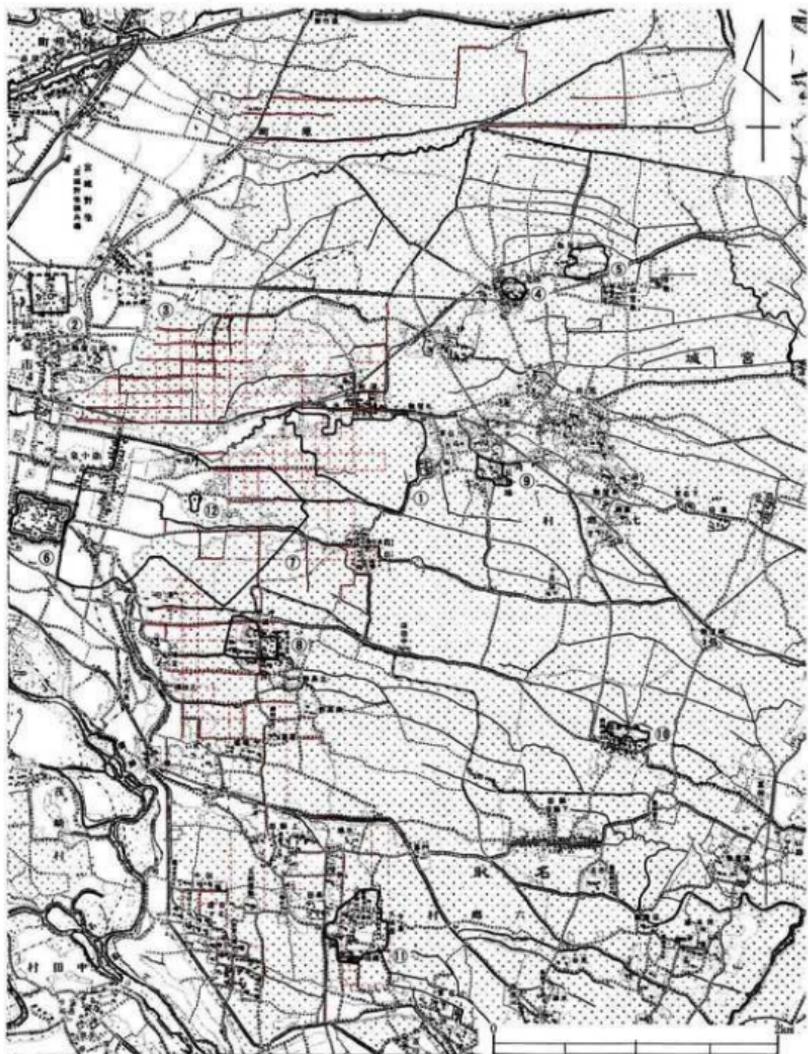
今回の調査地点は、遺跡の南西端、仙台市南小泉字伊藤屋敷下25-17に位置する(第8図)。

2. 調査に至る経過

昭和60年3月29日付で、仙台市南小泉字伊藤屋敷下25-17、菅野安清・菅野浩昭氏より、住宅新築に伴う仙台東郊条里跡の発掘届が提出された。建物が構造上パイル工法を伴うこと、本遺跡がこれまで未調査で性格等が不明であることなどから、申請者の承諾を得、同年6月24日より敷地内の発掘調査を実施した。調査区は排上の関係上、東西10m南北2m程の極めて狭い範囲である。



第8図 調査区位置図



- | | |
|-----------|----------|
| ① 仙台東郊糸里跡 | ⑦ 南小泉遺跡 |
| ② 陸奥国分寺跡 | ⑧ 沖野城跡 |
| ③ 陸奥国分尼寺跡 | ⑨ 長喜城跡 |
| ④ 北屋敷遺跡 | ⑩ 藤田新田遺跡 |
| ⑤ 明屋敷遺跡 | ⑪ 今泉遺跡 |
| ⑥ 若林城跡 | ⑫ 遠見塚古墳 |

——— : 地形図上に残る地割

⋯⋯⋯ : 航空写真から復元した地割

(明治40年 大日本帝国陸地測量部 仙臺近傍九号「郡町」を複製)

第9図 遺跡周辺地形図

3. 調査概要

今回の調査は遺構の確認を目的とした。盛土及び旧耕作土を重機で掘削し、その後、第5層上面まで精査を行ったが遺構は検出されなかった。各層位は、未分解の植物遺体を含む泥炭質粘土層で、粘性が高い(第10図)。出土遺物はなかった。



第10図 調査区東壁断面図

4. まとめと今後の課題

今回は調査面積の制約から、条里跡に係る遺構を検出することはできなかった。また、現地での地形観察も試みたが、宅地化・耕地整理等により、これも不可能であった。

条里遺構調査の方法には、発掘調査と並行、あるいはそれに先行する手段として、古地図・地籍図・耕地実測図等からの一町四方の地割や地名(坪・条など)の検索、航空写真による検討、現地での地形観察などが必要であるとされている。これらをもまえ、本年度は本遺跡を含めた周辺の地形における条里遺構存在の有無について、地形図・航空写真による検討を試みたい。資料は、開発ができるだけ及んでいない時期のものがよく、地形図は明治40年代発行のもの、航空写真は昭和32年撮影のものとした。

現存、あるいは最近まで残っていた耕地の地割形態が、条里遺構か否かの判定基準としては、(1)一町(約109m)四方の方格の土地割があること、(2)方格の内部が、長地型または半折型ないしその変形とみなすべき土地割によって区画されていること、(3)このような耕地割が、ある広がりをもって連続していること、以上の3点があげられる。地形図(第9図)によると、本遺跡には見当たらないが、西方約1kmの仙台市大和町・中倉付近(旧宮城野住宅)及び南方約2kmの仙台市沖野付近に、方格の地割が存在している。また、北方の仙台市苦竹付近、南方の日辺・今泉・下飯田付近にも一部残っているようである。これらの事実は、前述の基準(1)、(3)を満たすものと考えられる。

伊東信雄氏は仙台市東郊の耕地割について、「東は福田町・七郷、西は木ノ下・北月・郡山附近、南は日辺・下飯田附近、北は苦竹・岩切に至る七北田川と広瀬川の間の広い平野の中に、東西あるいは南北に走る平行した水路や小径が各所に見られる。その最も判然としているのは新屋敷から日辺の間で、ここに宮城野住宅と荒浜街道の間や六郷の沖野部落の西方に著しく、

ここでは水路や小径の間隔が約一町おきにある。このあたりで耕地整理が行われたということは、記録にもないし言伝にもないので、この碁盤目状の地割は近代のものではなく、しかもその東西線・南北線（の方向）が、発掘によって確認された陸奥国分寺跡の東西線・南北線（の方向）とほぼ一致するので、奈良時代まで遡り得ることは間違いない。^(注4)」としている。この伊東氏の見解は、地形図の検討ともほぼ一致するものであろう。

それでは、方格の土地割りの内部はどのような地割になっているだろうか。地形図では判断できないため、航空写真で検討してみたい。写真は本遺跡及び周辺のものである。現在では、このような耕地割は現地ではほとんど確認できないが、これによると、本遺跡の西半部及び西方約1kmの地点（現在の仙台市大和町附近）、南方2～3kmの地点（沖野から日辺・今泉附近）に、一町四方の方格の土地割が一部残っているようである。この地割は地形図（第9図）ともほぼ対応している。内部の地割は、本遺跡内に一部半折型が見られるが、大半は長地型あるいはその変形とみなすことのできるものである。従って、既述の基準⁽²⁾も確認されたことになる。

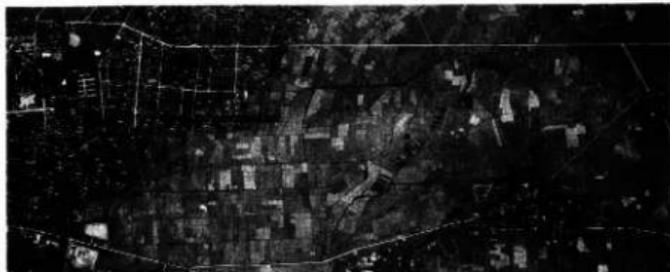
以上の検討から、本遺跡及び周辺に最近まで残っていた耕地割は条里遺構と考えられよう。これを裏付けるように、「二の坪」・「三の坪」の地名も残っている。今回の調査では、遺構は検出されなかったが、航空写真の検討により、本遺跡内における条里遺構の存在を確認することができた。これらのことから、本遺跡西半部で条里遺構が検出される可能性は十分にあると言えよう。今後は、今回の検討によって得られた結果を実証するために、より広範囲な調査区の設定を図るべきであろう。また、現地での地形観察が不可能な以上、本遺跡及び周辺地域の宅地化・耕地整理以前の地籍図、字切図等の検討も必要である。これらを今後の課題としたい。

（渡辺 誠）

註・参考文献

- 註1. 地学団体研究会「新版・仙台的地学～仙台支部編～」1980
- 註2. 経済企画庁「地形・表層地質・土じょう 仙台」1967
- 註3. 弥永貞三「条里制の諸問題」『日本の考古学Ⅳ・歴史時代下』P.205～221 1981
- 註4. 伊東信雄「宮城県史1・古代史」P.130～132 1955

仙台市大和町地区



南小泉～沖野地区



今泉地区



図版11 遺跡周辺航空写真
(昭和32年撮影)

[3] 教塚古墳

1. 遺跡の位置と環境

教塚古墳(仙台市文化財登録番号C-014)は、国鉄長町駅の南西約2km、仙台市泉崎一丁目32-5外に位置する(第1図)。この位置は、富沢水田遺跡の南西部にあたり、南約30mには山口遺跡がある(第11図)。本古墳は、名取川及びその支流の広瀬川によって形成された沖積平野である「宮城野海岸平野」中の「郡山低地」西半部の後背湿地上に立地する。

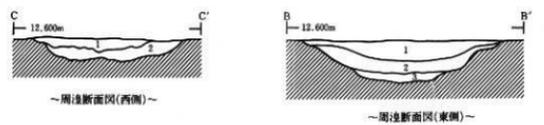
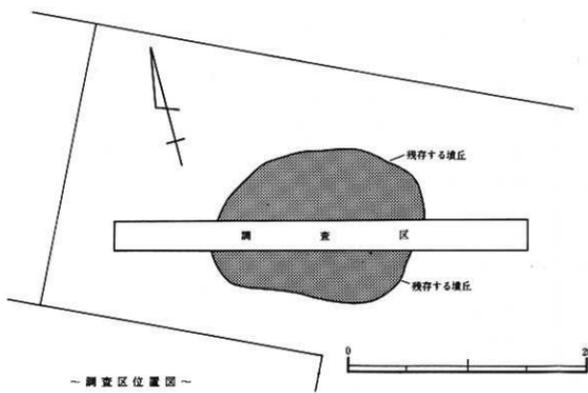
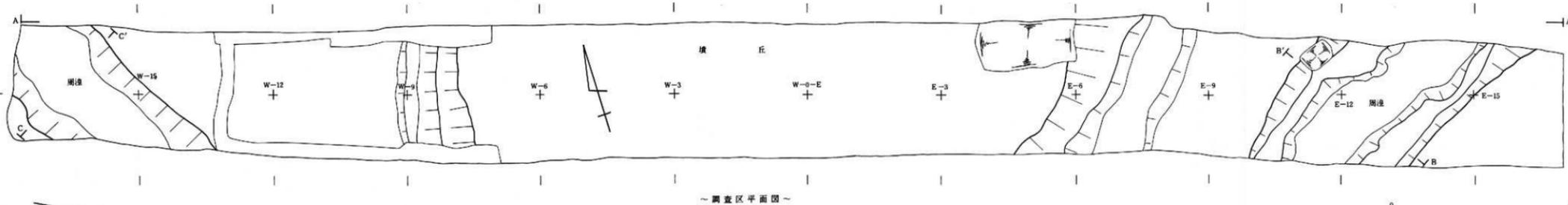
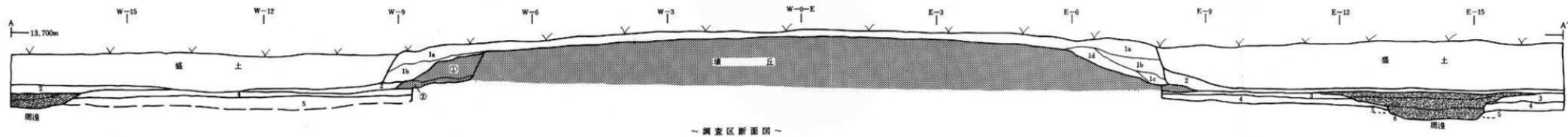
周辺には、旧石器時代から中世に至る数多くの遺跡が分布している。^(註1)古墳時代では北方に埴輪を持つ前方後円墳である裏町古墳の他、^(註2)砂押古墳、^(註3)三神塚古墳群、^(註4)金洗沢古墳、^(註5)兜塚古墳、^(註6)富沢埴輪窯跡、大年寺山横穴群、愛宕山横穴群、宗禅寺横穴群がある。また、東方の大野田地区には五反田古墳、^(註7)大野田古墳群、^(註8)鳥居塚古墳、春日社古墳、王ノ塚古墳があり、この地域一帯における古墳群の形成を窺い知ることができる。

2. 調査に至る経過

本古墳は以前から畑地に利用され、埴輪片も採集されていたが、これまで発掘調査が行われたことはなく、古墳の規模等も不明であった。昭和60年4月になり、古墳を含めた周囲の土地の盛土が行われ、古墳としての景観が著しく損なわれるに至った。仙台市教育委員会は、現地



第11図 遺跡位置図



周濠堆積土

層位	土色	土性	備考
西側 1	2.5Y 黒褐色	シルト	黒色・暗灰褐色シルトを混状に含む
西側 2	2.5Y 暗灰黄色	砂	黒色粘土を混状に、下面に径1~5cmの礫を含む
東側 1	10Y R 黒色	砂質シルト	炭化物を混状に含む
東側 2	2.5Y 黒褐色	シルト	黒色・にじい黄色シルトを混状に含む
東側 3	10Y R 黒色	粘土	下面に暗灰黄色シルト・径1~5cmの礫を含む

墳丘封土土層註記

層位	土色	土性	備考
①	10Y R 褐色	砂質シルト	酸化鉄を混状に含む 礫片を少量含む
②	10Y R 褐色	粘土質シルト	上面に酸化鉄を混状に含む

基本層位土層註記

土層	土色	土性	備考
1a	10Y R 黒褐色	砂質シルト	
1b	7.5Y R 暗褐色	シルト	田耕作土(畑)
1c	10Y R 暗褐色	シルト	
1d	7.5Y R 暗褐色	シルト	
2	7.5Y R 暗褐色	粘土	田耕作土(水田)・酸化鉄を混状に含む
3	10Y R にじい黄褐色	シルト質砂	酸化鉄を多量に含む
4	7.5Y R 黒色	粘土	礫片を混状に含む
5	10Y R 暗褐色	シルト質砂	酸化鉄を混状に含む
6	10Y R 黒褐色	粘土	未分解の植物遺体を少量含む

第12図 調査区平面図・断面図

確認の上、この盛土行為を古墳の破壊行為と同等のものと考え、同年4月26日付で、地権者である、仙台市西多賀一丁目16-35、庄子勝雄氏に遺跡の発掘届を提出させた。

今回の調査は、この届に基づく遺構範囲確認調査である。調査区は、残存する墳丘（東西長17.5m、南北長12mの不整形円形）の中央を通る、幅2.5m、長さ30mの東西に長いトレンチとし、同年7月24日より調査を実施した。

3. 基本層位

盛土層を除き、6層確認された。第1層は畑耕作土である。第2層は盛土以前の旧耕作土（水田）である。第3層はシルト質の砂層で、調査区東側ほど厚く堆積し、西側は耕作により、ほとんど削平されている。第4層は粘土層で、調査区西側の上面は一部削平されている。第5層はシルト質の砂層である。第6層は黒褐色の粘土層で、調査区東側周濠底面の一部確認された。第3層以下の層位面は、調査区東側ほど低く、西側との比高差は10~20cmを計る。

4. 発見遺構

盛土及び第1・2層を重機で排土し、精査を行ったところ、残存する墳丘及び周濠の一部を検出した（第12図）。標高は、墳丘上面で13.4~13.7m前後、周濠上面で12.5m前後である。

(1) 墳 丘

第1層（畑耕作土）及び第2層（旧水田耕作土）直下で検出した。残存する墳丘の東西長は13.6~18mを計る。墳丘上部は西側及び南側へ傾斜しており、墳丘裾端部からの高さは東側で0.9~1.2m、西側で0.8~1mを計る。墳丘裾部の傾斜は、東側ではゆるやかであるが、西側では比較的急である。墳丘裾部から周濠にかけては、東側で2~2.5m、西側で4.2~7mほどの平坦な面がある。封土は東側で基本層位第3層上面、西側では第4層上面を基底面として積まれている。墳丘西端部に一部トレンチを設定したところ、封土は褐色系の砂質または粘土質のシルト層であることが観察された。主体部は検出されなかった。また、墳丘裾部付近から埴輪片が出土したが、埴輪の握え方は検出されなかった。このため、埴輪列の位置も不明である。墳丘上部東端には、第4層をブロック状に含む攪乱がある。

(2) 周 濠

第2層直下、第3層及び第4層上面で検出した。

〔調査区東側〕残存する墳丘裾部から2~2.5mほど東側、第3層上面で検出した。北東から南西方向にゆるく弧状に延びる。規模は、上端幅3.3~3.4m、下端幅0.9~1.2m、深さ0.5~0.7mを計る。方向は墳丘裾部とほぼ一致している。断面形は「U」字形を呈する。堆積土は3層で、黒色の砂質シルト層、黒褐色の粘土層、黒色の粘土層から成る。各層位から埴輪片が出土したが、まともはなかった。

〔調査区西側〕残存する墳丘裾部から4.2~7mほど西側、第4層上面で検出した。南北方向に

ゆるく弧状に延びる。規模は、上端幅2.3~2.5m、下端幅1.1~1.6m、深さ36~48cmを計る。方向は墳丘裾部と一致しない。断面形は浅い「U」字形を呈する。堆積土は2層で、黒褐色のシルト層、暗灰黄色の砂層から成るが、調査区東側の堆積土とは異なった様相を呈する。各層位から埴輪片が出土したが、まとまりはなかった。

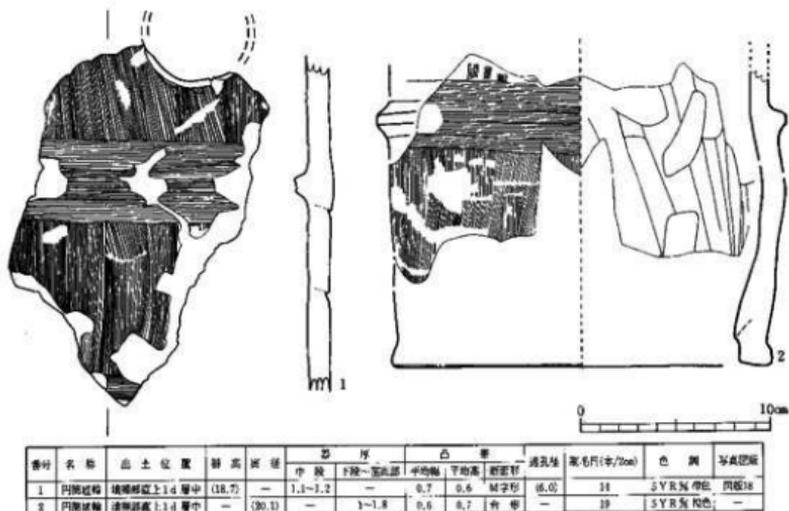
5. 出土遺物

出土遺物の大半は埴輪片で、総量は平箱で2箱分ほどである。その他に須恵器片1点、弥生土器片4点が出土しているが、いずれも小破片であり図化したものは1点もない。

埴輪片は残存する墳丘裾部直上の第1b層中及び周濠から出土した。大半が円筒埴輪か朝顔形埴輪の体部片・底部片で、わずかに口縁部片がある。形象埴輪片は全く見られなかった。完形品とはならなかったため、全形は不明である。

〔体部片〕凸帯が貼りつけられ、その上部に透孔が穿たれている。外面調整は、縦方向の刷毛目が施された後、凸帯が貼りつけられ、横ナデが施されている。凸帯の断面形は「 $\}$ 」形状を呈する。内面調整は、縦方向にヘラ状の工具によるナデが施されている（第13図-1）。

〔底部片〕接地面の上方に凸帯が貼りつけられている。外面調整は、縦方向の刷毛目が施された後、凸帯が貼りつけられ、横ナデが施されている。凸帯の断面形は「 $\}$ 」形状を呈する。内面調整は、底部部に指ナデの後、縦方向にヘラ状の工具によるナデが施されている。また、粘土紐の接合痕も観察される（第13図-2）。



第13図 出土遺物実測図

第2表 出土遺物集計表

種別	出土層位	基本層位					周濠					計
		1a層	1b層	1d層	2層	2層	西側	東側	西側	東側	3層	
円筒埴輪片	体部	35	40	1			15	4		18	1	184
	口縁部			2						1		
筒形埴輪片	体部											
	口縁部		1								1	5
埴輪片	体部				1							1
埴輪片	口縁部							2			2	4

6. まとめと今後の課題

今回の調査は、本古墳の範囲確認を目的として実施した。その結果、残存する墳丘及び周濠の一部を検出した。尚、調査区が狭いため、古墳全体の規模、形状は不明である。

墳丘封土は、砂質または粘土質シルト層から成り、墳丘東側では第3層上面、西側では第4層上面を基底面としている。この基底面の違いは、調査区の傾斜を示すものである。

墳丘裾部は、調査区西側ほど傾斜が急で、周濠の規模も小さく、しかも方向が墳丘裾部と一致していないことから、西側ほど削平を受けており、東側の削平の度合は少ないと考えられる。墳丘上部も、調査以前まで畑として耕作されてきたこと、墳丘裾部が削平されていることから、同様に削平を受けていると考えられる。

主体部は検出されなかった。前述の検討と、調査以前から本古墳が現在のような形状を呈して遺存していたことを考え合わせると、主体部が存在している可能性は薄いと言えよう。

本古墳と同様に、埴輪を伴う周辺の古墳には、裏町古墳、大野田古墳群、春日社古墳、砂押古墳などがあり、築造年代は、共伴遺物から裏町古墳で6世紀初頭前後、大野田古墳群で5世紀後半～6世紀初頭とされている。このように、埴輪を伴う古墳の築造年代は、およそ5世紀後半から6世紀前半と捉えられている。しかし、本古墳がこの年代の中で、どの時期に位置づけられるかの判定は、共伴遺物がなかったことから困難であり、時期の決定は差し控えたい。

墳丘裾部の両側で検出した溝跡は、規模や方向、出土遺物等から、既述のように本古墳に伴う周濠と捉えたが、次のような今後検討すべき課題も残されている。第一に、墳丘封土と周濠掘り込み面下位の基本層位との関係である。墳丘封土は、既述のように砂質または粘土質のシルト層から成っている。これに対し、周濠壁面で観察された基本層位は、粘土層とシルト質の砂層で、封土とは異なった様相を呈している。よって、墳丘封土は周濠からのものとは考えにくい。他の地点からの搬入の可能性も考えられよう。第二に、周濠規模に関する問題である。検出部分から推定される周濠の規模を約40mと仮定すれば、墳丘の中央から北側にかけての9割以上が削平されてしまったことになる。調査時における墳丘の遺存状況からみれば、この墳丘の推定値は、残存する墳丘との比較差があまりにも大きいものである。今回の調査では、この推定値を裏付ける確証は得られなかったが、墳丘部分周辺の調査を待つて、検討しなければならない課題である。

(渡辺 誠)

註・参考文献

- 註1. 地学団体研究会「新版 仙台の地学～仙台支部編～」1980.
註2. 経済企画庁「地形・表層地質・土じょう 仙台」1967
註3. 本書、P. 5～6 参照
註4. 仙台市教育委員会「裏町古墳発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書第7集』1974・3
註5. 仙台市教育委員会「仙台平野の遺跡群Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書第47集』P. 3～10
1983・3
註6. 古塚跡研究会「富沢窯跡～仙台市三神塚丘陵所在埴輪窯跡調査報告書」『研究報告第3冊』
1974・9
註7. 仙台市教育委員会「六反田遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書第34集』P. 162
1981・12
註8. 仙台市教育委員会「年報3」『仙台市文化財調査報告書第41集』P. 13～28 1981・3
註9. 註4に同じ。
註10. 註8に同じ。



図版12 盛土以前の古墳遺存状況(南より)



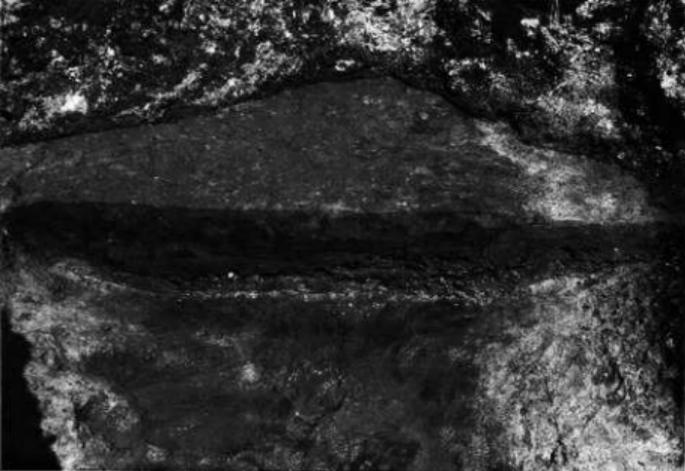
図版13 古墳盛土後の状況（南東より）

図版14 調査区全景（東より）



図版15 調査区全景（西より）





図版16 周埕(西側)断面
(南東より)



図版17 周埕(東側)断面
(北東より)



図版18 基本層位1d層出土円筒埴輪片

[4] 大年寺惣門

1. はじめに

大年寺惣門（仙台市文化財登録番号A-022）は、国鉄長町駅の北西約1.3km、仙台市茂ヶ崎四丁目40-2地先に位置する（第1図）。この位置は、仙台市南部から名取市、岩沼市方面を一望できる青葉山丘陵中の大年寺山南斜面の中腹にあたる（第14図）。標高は約38mである。

大年寺山は、古くは「野出口山」と称されていた。建武年間から天正年間にかけて、茂ヶ崎城が築かれている。城主は、名取郡北方三十三郷の旗頭、栗野大膳で、その規模は「山茂ヶ崎城、東西八十六間、南北六十一間、本丸より二ノ丸の間数は二百八十間余、山続き平地あり。」
(註1・2)
とされている。

青山公治家記録によれば、大年寺の歴史は、この茂ヶ崎城跡の地を元禄9年（1696）10月16日、四代藩主伊達綱村が寺院造営の縄張、兼初めを行った時に遡る。(註3)翌、元禄10年（1697）1月25日に鉄牛和尚が現地を見分、同年3月8日、大年寺建立成就して鉄牛和尚が入院、臨済派黄檗宗の両足山大年寺として開山されている。(註4)
(註5)その後、大年寺の堂宇は、京都の大本山萬福寺を擬した七堂伽藍を配したとされている。これらの堂宇の創建年代には不明な点が多いが、仏殿の成就・入仏は、元禄16年（1703）7月11日であり、また、享保4年（1719）4月19日には
(註6)



第14図 調査区位置図

塔頭建屋の事蹟が行われていることから、元禄年間から享保年間にかけての整備が考えられる。^(註7)
四代藩主綱村の没以降は、大年寺は伊達家の霊廟となり、五～八代・十代・十二～十五代の藩主が祀られている。明治維新後、大年寺の堂宇は柳弘毅殿によりほとんど取り壊され、この惣門だけが往時を偲ぶ唯一の建物となり、今日に至っている。^(註8)

2. 調査に至る経過

現在の大年寺惣門の構造は、佐藤 巧氏によれば、2本の円柱の本柱に肘木を挿して軒桁を支え、本柱の頂部には斗を載せて直ちに棟木を受け、切妻の棧瓦葺屋根を葺く。本柱の背後に控柱を建て、この上にも切妻の棧瓦屋根をかけ、また本柱の左右両脇にも支柱を建てて同じく切妻の棧瓦屋根をかけ、都合5個の切妻屋根を持つ、とされている。^(註9)門の形式は高麗門に属すが、さらに左右に袖をつけ一段と複雑にした形で、黄檗宗建築としては奇抜な門となっている。

大年寺惣門は上記の構造上の特徴から、昭和60年9月4日付で、仙台市有形文化財(告示第4号)に指定されている。しかし、長い年月の風雨により、門の破損は著しく、倒壊の危険も考えられた。このため、本年度、仙台市教育委員会は大年寺惣門の解体・修復工事を実施することとした。

今回の調査は、この工事に伴い、惣門の創建時期、柱位置の建替の有無等の確認を目的とした。調査は惣門の解体後、昭和60年10月28日より実施した。

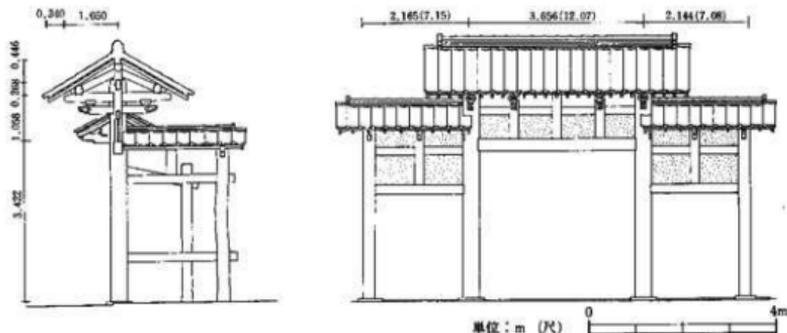
3. 層位

調査区内の層位は、表土、整地層の2層に大別される。表土はにぶい黄褐色のシルト層で、層厚は10～16cmを計る。整地層は調査区壁面、及び掘り方壁面で観察された範囲で3層に大別される。整地第1層(以下、第I層)は、にぶい黄褐色シルト層で、層厚は10～16cmを計る。第II層は褐色シルト層で、層厚は20～50cmを計る。第III層は褐色シルト層と暗褐色シルト層の互層で層厚は130～150cmである。尚、第I層は調査区内では検出されず、地覆石直下のみ見られる。これは、後述するように、敷石の敷き直しの際、攪乱を受けたためである。調査区内で旧地山は検出されなかった。この位置は、約17°の南斜面である。よって、整地層の厚さは推定で、門の背面2m程、正面5m程と考えられる。

4. 調査概要

惣門解体後の状況は、正面中央に2個の礎石(以下、東側をNa1、西側をNa2)、礎石の間及びその両側に地覆石、地覆石の南側及び本柱間北側の通路部分に石敷が見られるというものであった。本柱の支柱は、西端の地覆石上、及び東端から2個目の地覆石上の上っていた。また、本柱背後の控柱及びその西側の支柱の控柱基部にはコンクリートが巻き付けられ、最近の補修の跡を残していた。

(1) 地覆石 礎石の間に6個、礎石Na1東側に5個、Na2西側に4個残っていた。第I層上



第15図 大年寺惣門実測図 (佐藤 巧・1983原図)

面にのる。石上面のレベルはほぼ一定である。この内、東西両端の各2個は原位置を保っていない。これは、調査区南壁の断面からも確認された。地覆石は30×50cm程の長方形で、厚さは20cm前後を計る。底面に凹凸があるが、上面及び側面が平坦に加工されている。

(2) 石敷 地覆石の南側及び北側の通路部分に残っていた。ビニール片、ガラス片等を含む表土の除去中に、通路部東辺直下からも一部検出されたことから、本来は礎石No1の東端、礎石No2の西端間の第Ⅰ層上面に敷いたものを、その後、敷き直していることが判明した。敷石は50×80cm程の四角形または五角形に加工されたものが多く、厚さ10～30cmを計る。裏面は自然石を削っただけであるが、表面は平坦に加工されている。

調査区は、礎石及び控柱等の掘り方検出のため、地覆石の北側、東西9.4m、南北3mの範囲とした。その後、表土、敷石、控柱・支柱のコンクリートを除去し、掘り方の検出を行ったところ、第Ⅱ層上面で掘り方を8基検出した(第17図)。以下、各掘り方はNo1～8、その中で建替についてはA・B・C…の順で記述する。尚、前述したが掘り方壁面では、第Ⅲ層整地層が互層になって観察された。

(3) 掘り方No1 調査区東隅で検出した。調査区の関係で北から西にかけての約1/4だけ検出されたものである。掘り方No4と対応する。掘り方No5-Aの攪乱により北壁上部を切られ、中央上部を攪乱に切られる。全形は不明であるが、地覆石の南側までは延びており、一辺が150cm程の方形と考えられる。深さは130～140cmを計る。埋土は5層で、褐色系のシルト層から成る。層中には径0.5～5cmの礫を多量に含み、瓦片も若干出土した。柱穴が検出されなかったため、性格は不明であるが、掘り方が地覆石をはさむ範囲と見られること、及び、地覆石東端2個が動いている他、東から3個目の地覆石も、その厚さが他と比べて、半分以下であることから、支柱も孤立しており、その掘り方であった可能性が高い。

(4) 掘り方No.2 礎石No.1に伴う。掘り方No.3と対応する。礎石は、一辺約60cmの正方形、厚さ60~65cm程の不整形に自然石を粗く加工したもので、上面を一辺約60cmの正方形、厚さ約8cm程に造り出している。中心には直径20cm程の納穴が穿たれている。礎石倒壊の恐れから、掘り方底面まで掘り下げていないため、全形は不明であるが、掘り方は長径210cm前後の円形を呈し、深さは60cm以上と考えられる。埋土は褐色系のシルト混じりの礫層で6層に細分される。礫石下面の埋土4・5・6層には、径10~25cmの礫が多量に詰められている。また、埋土1層中には礎石の加工片が多量に混入しており、礎石を掘えてからの二次加工が窺える。

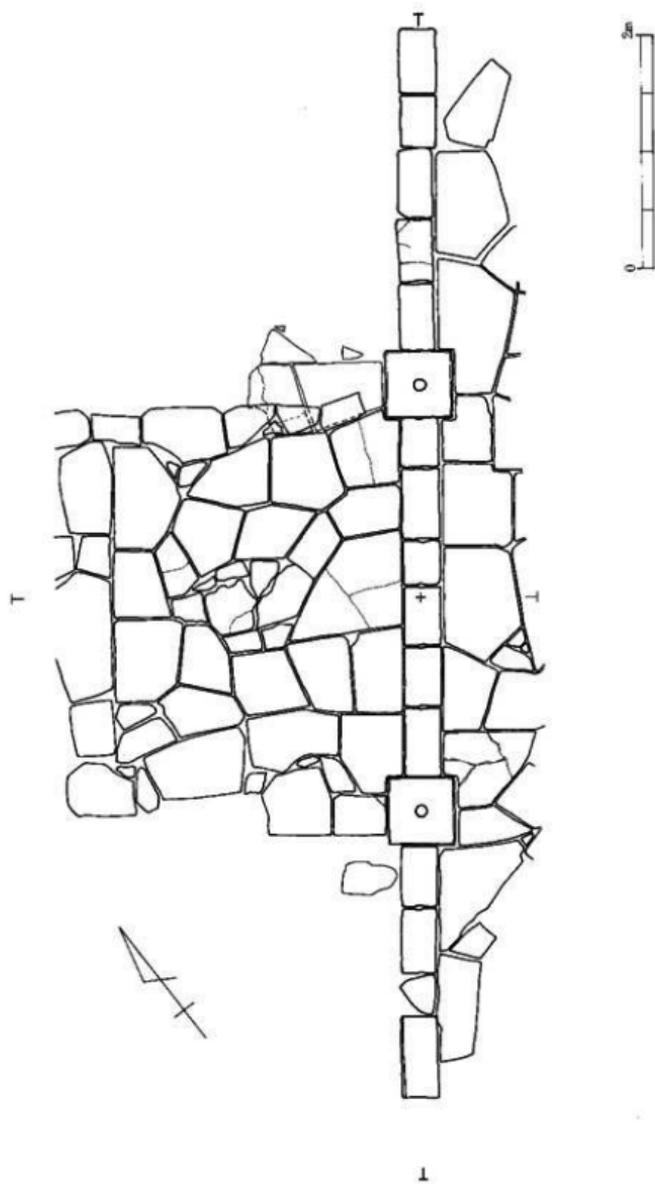
礎石の掘え方について整理してみると、①掘り方を掘り、②その中に礫(4層以下)を入れ、③粗加工した礎石を掘えて、④動かないように再度礫(2・3層)を入れ、⑤礎石上面を再加工し、掘り方を完全に埋めている(1層)と考えられる。

(5) 掘り方No.3 礎石No.3に伴う。掘り方No.2と対応する。礎石は、一辺の長さを約90cm、厚さ60~65cm程の不整形に自然石を粗く加工したもので、上面を一辺約60cmの正方形、厚さ約12cm程に造り出している。中心には直径20cm程の納穴が穿たれている。礎石No.1と同様に全形は不明であるが、掘り方は長径180cm前後の円形を呈し、深さは60cm以上と考えられる。埋土は褐色系のシルト混じりの礫層で4層に細分される。礎石下面の埋土4層には、径8~20cmの礫が多量に詰められている。また、埋土2層中には、礎石の加工片が少量混入しており、礎石No.1と同様に、二次加工が窺える。礎石の掘え方については、掘り方No.2と同様と考えられる。

(6) 掘り方No.4 調査区南隅で検出した。掘り方No.1同様、ほぼどの検出であった。掘り方No.1に対応する。北壁の一部を掘り方No.8-Aの攪乱に切られる。全形は不明であるが、地覆石の南側まで延びており、掘り方は一辺が160cm程の方形と考えられる。深さは130~140cmを計る。埋土は、褐色系のシルト層から成り、8層に細分される。層中には径0.5~10cmの礫を含み、瓦片も若干出土した。柱穴が検出されなかったため、性格は不明であるが、掘り方が地覆石をはさんで南側まで及ぶこと、地覆石の西端2個が動いていることから支柱の掘り方であった可能性が考えられる。

(7) 掘り方No.5 掘り方No.1北側で検出した。支柱の控柱に伴う掘り方である。掘り方No.8に対応する。4時期の変遷があり、以下、各時期について記述する(第18図-1)。

No.5-Aは最近まで残っていたと考えられる控柱の掘り方と、それに伴う攪乱である。攪乱の深さは、検出面(Ⅱ層上面)から約60cmを計る。BはA以前の掘り方である。掘り方の大きさは不明であるが、検出面から約70cm下の底面には礎板にしたと考えられる瓦片が敷かれていた。埋土からはガラス片も出土し、しまりも全くないことから、A同様、最近の補修時の痕跡と考えられる。CはB以前の掘り方である。掘り方の大きさは不明であるが、底面の深さは検出面から約1mを計る。埋土は褐色シルト層である。底面には礎板と考えられる20×35cm程の五



第16圖 石敷測測圖

角形の平坦な石が残っていた。Dは創建期の掘り方と考えられる。掘り方の大きさは、上端で南北160cm程、東西80cm以上の方形と考えられる。底面は検出面から約150cmの深さで、南北約90cm、東西55cm以上である。埋土は褐色系のシルト層である。礎板等はみとめられなかった。

(8) 掘り方No.6 掘り方No.2北側で検出した。右本柱の控柱に伴う掘り方である。掘り方No.7に対応する。3時期の変遷がとらえられた(第18図-2)。

No.6-Aは惣門解体時まで残っていた控柱と、それを補強するコンクリート工事による擾乱で、検出面から約40cmの深さがある。BはA以前の掘り方である。全形は不明であるが、掘り方の大きさは一辺が120~180cmの長方形を呈するものと考えられる。深さは130cmを計る。埋土は褐色シルトで、礫、瓦片も若干出土した。掘り方東壁寄りには、柱穴と礎板に用いられた25cm角ほどの石が残っていた。また、この掘り方の一部は創建期掘り方の底面をも切っており、そこに幅約45cm、深さ約20cmの自然石を用いた暗渠が検出された。この暗渠南端は掘り方内に認められるが、もう一方は掘り方外へ穴状に続いていた。雨水等の浸透による柱根の腐敗を防ぐ意図が考えられる。このことから惣門北側に暗渠排水を受ける掘切り等の存在も考えられる。Cは創建期のものである。全形は不明であるが、一辺が180cm程の方形プランとみられ、深さは約110cmである。埋土は褐色系のシルト層で、径1~6cmの礫、及び瓦片も若干出土した。

(9) 掘り方No.7 掘り方No.3北側で検出した。左本柱の控柱に伴う掘り方である。掘り方No.6に対応するもので、4時期の変遷がとらえられた(第19図-1)。

No.7-Aは惣門解体前までコンクリートを巻き付けられ残っていた柱に伴う掘り方ないし擾乱である。擾乱の深さは約72cmを計る。BはA以前の掘り方である。掘り方の大きさは不明であるが、底面の深さは検出面から約120cmで、柱の下部が残存していた。埋土にはコンクリート片、ガラス片も混入しており、しまりも全くないことから、そう古くない時期の建替え痕跡と考えられる。CはB以前の掘り方である。掘り方の大きさは東西約90cm、南北約120cmを計る。底面は検出面から約140cmである。底面は創建期掘り方の底面を切っており、南側寄りに礎板と考えられる15×30cm程の台形状の石が残っていた。埋土は瓦片を多量に含むものであった。Dは惣門創建期の掘り方と考えられるものである。掘り方の大きさは、一辺約180cmの方形で、深さは検出面から約120cmである。埋土は褐色系のシルト層から成り、径1~10cmの礫を多量に含み、瓦片も若干含むものである。この掘り方壁面には、基本層位の第Ⅲ層が褐色シルトと暗褐色シルトの互層となって観察されたが、このきれいな水平積土も、北側が土崩れをおこしたのか、傾斜して捉えられる。このことは、掘り方No.6-Bでも述べたように、惣門背面が一段低かったことを推察させるものである。

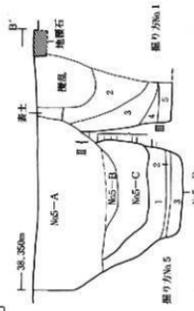
(10) 掘り方No.8 掘り方No.4の北側で検出した。支柱の控柱に伴う掘り方であり、掘り方No.5に対応するもので、4時期の変遷がとらえられた(第19図-2)。

土層註記

調査区	層位	土質	備考
調査区A	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区B	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区C	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区D	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区E	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土

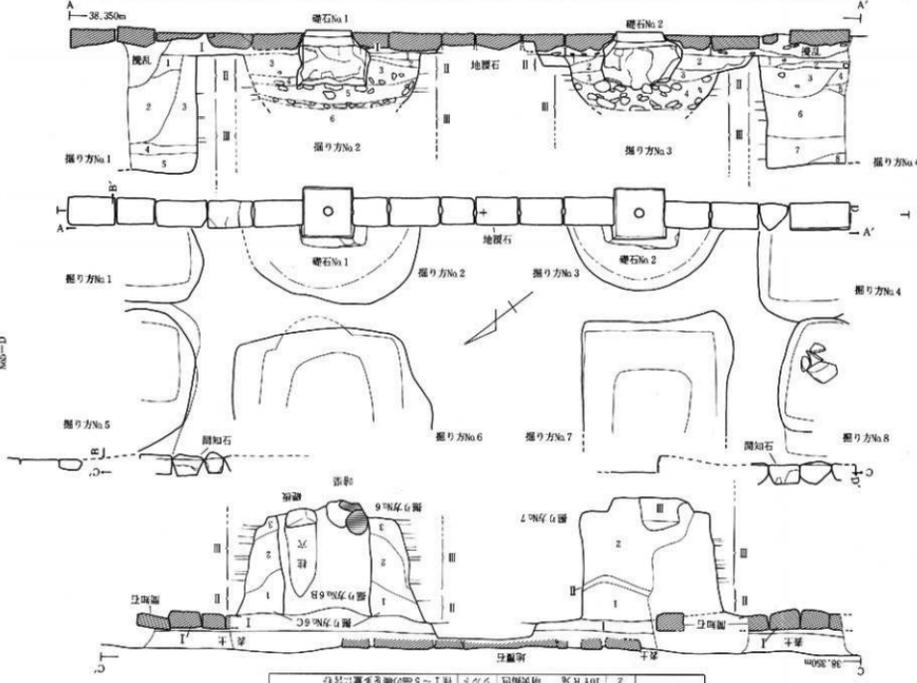
土層註記

調査区	層位	土質	備考
調査区A	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区B	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区C	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区D	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区E	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土



土層註記

調査区	層位	土質	備考
調査区A	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区B	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区C	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区D	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区E	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土



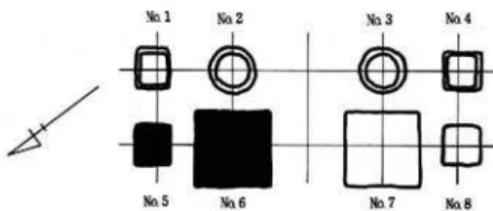
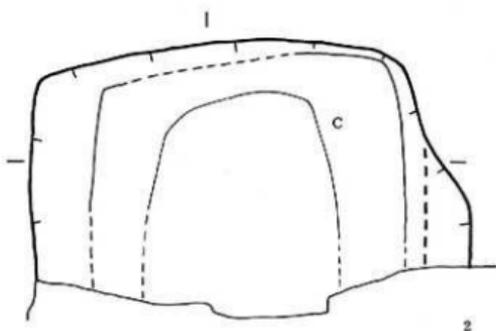
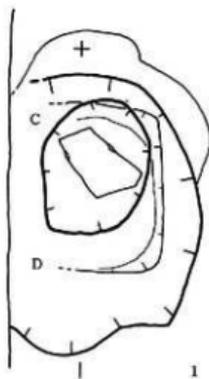
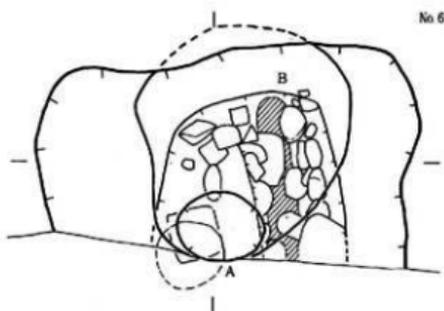
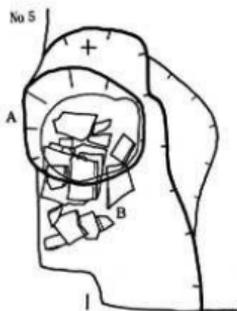
土層註記

調査区	層位	土質	備考
調査区A	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区B	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区C	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区D	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区E	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土

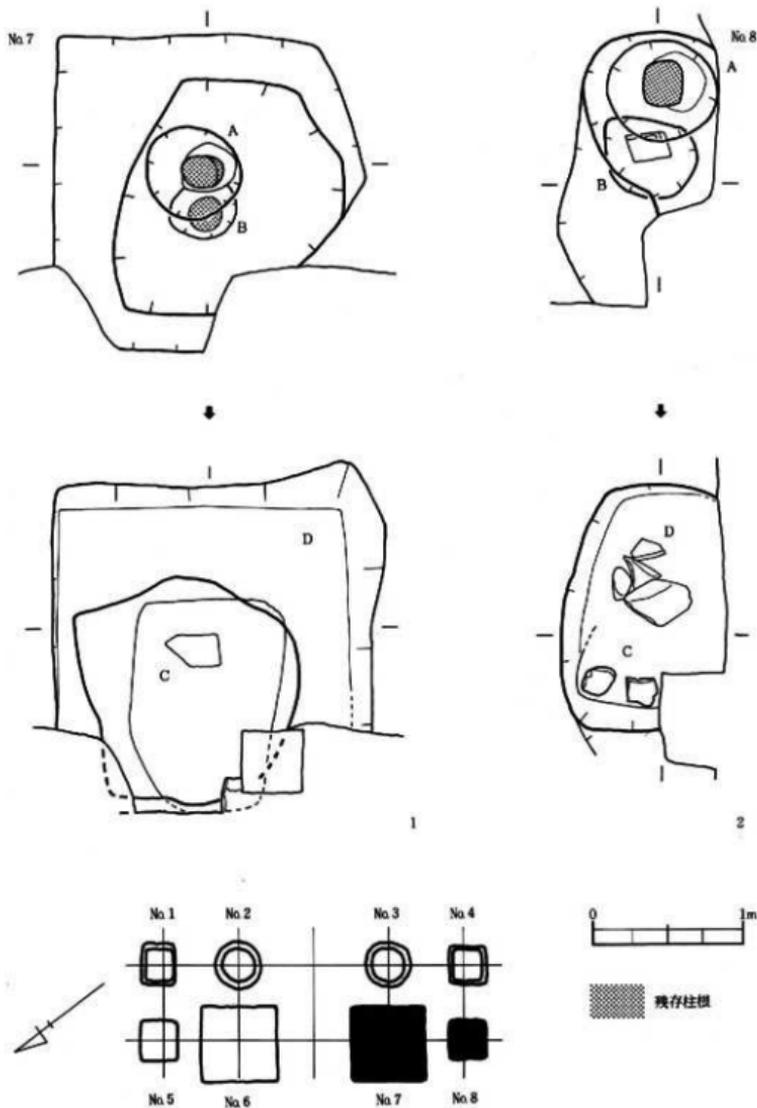
第17図 調査区平面図・断面図

土層註記

調査区	層位	土質	備考
調査区A	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区B	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区C	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区D	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土
調査区E	1	10YR 6/3 黄褐色	1.5m以上、多量の腐葉土



第18圖 掘り方変遷図 I



第19図 掘り方変遷図Ⅱ

No.8-Aは、コンクリートを巻き付けられた柱基部が残っており、最新補修時の痕跡である。これは掘り方No.4の南壁上部を若干切っている。深さは、検出面から約80cmである。BはAの底面より、更に25cm位下がったところに底面があり、そこには礎石に用いられたと考えられる方形の石が残っていた。埋土は褐色のシルト層であり、瓦片、釘片、ガラス片などが混入し、A同様、新しい補修痕と考えられる。Cは深さが約140cmである。埋土は褐色系のシルト層から成り、径1～8cmの礫、瓦片が出土した。底面には礎板に用いられたと考えられる石が2個残っていた。Dは創建期のものであろう。前述したA～Cにより、少々プランが変形しているが、一辺が80～100cmの方形と考えられる。深さは150cmを計る。埋土は褐色系のシルト層で、径1～5cmの礫を多量に含み、瓦片も出土した。底面には礎板に用いられたと考えられる石が4個残っていた。

(11) 間知石列 調査区北壁際で1列検出した。Ⅱ層上面に配置されており、掘り方No.6及び7の上にも配置されている。この石列は調査区外の東にも西にも延びているのがわかるが、ちょうど中央の石敷通路範囲には見られない。この石列上面レベルは地覆石上面レベルより低く、また敷石以面レベルよりも低いので、工程的には、掘立柱掘り方を埋め、石敷通路等を完成させるまでの間と考えられてくる。通路部分に見られないのは、敷石の敷き直し等、改修工事に伴って除去されたものと考えられる。石列の意味は判然としないが、掘り方No.6-B、No.7-Dで考えられた理由から、土留めの効果をねらったものであろうか。

5. 出土遺物

出土遺物には、瓦、陶磁器、金属製品がある。

(1) 瓦 瓦は焼し瓦で、本葺瓦がほとんどであるが、棧瓦が1片発見された。本葺瓦の種類は、平瓦、丸瓦、軒平丸、軒丸瓦、鬼丸、その他である。平瓦、丸瓦には刻印のあるものも見られる。^(註10)

[平瓦] 大ききのわかるものは1点である。幅、長さとも26cmのもので、谷、頭の部分はきれいにナデられているほか、頭の部分が丸く面取りしてある。また、小口は垂直切りされている。これは掘り方No.6-B出土のものである。その他に幅不明だが、長さが同じ値を示すものが掘り方No.5-Bから出土している。これらをタイプ1とする。

これらと若干大ききの異なるものがある。幅不明であるが、長さ28.2cmのもので、29.2cmのもので、前者は掘り方No.5・No.6-A出土、後者は掘り方No.8-A出土のものである。前者をタイプ2、後者をタイプ3とする。

タイプ1～3の調整等はほぼ同じであるが、タイプ1・2は長軸断面形が「反り」の状態、タイプ3のそれは「起り」の状態になっている。層位から見て、ここでは若干寸法の小さいタイプ1の方が、タイプ2・3よりも古く位置付けられる。

〔丸瓦〕完全なものがなく、幅・長さとも知れるものはない。長さのわかるものは掘り方No.8—B出土の1点で、胴の長さが26.4cmで、凸面はきれいにナデられ、凹面には布日痕を残している。平瓦のタイプ1との同時使用が考えられる。幅がわかるものも1点で、掘り方No.5—A出土で、14.5cmである。次に記す1点以外は、全片、長軸断面形が「反り」の状態である。掘り方No.1出土のものに「起り」の状況を呈するものがある。尻部寄りの破片で、残存長が約20cmである。玉縁はなく、行基瓦のような形態で、釘穴が2個ある。「起り」で釘穴が見られることから、軒先に近い瓦（軒丸瓦の可能性もある）と考えられる。幅は頭部で最大になるように見られるが、尻部残片の幅は約13.2cmである。

大きさを含めたタイプ分けは不可能であるので、ここでは「反り」のものをタイプ1、「起り」のものをタイプ2としておく。

〔軒平瓦〕全体の寸法のわかるものはない。頭部幅のわかるものは掘り方No.6—Bから1点出土しており、26cmで平瓦タイプ1に共伴する。この瓦当部は接合面から離脱しており、文様は不明である。

瓦当文様は、均整唐草文の範ちゅうに入れられるものであり、瓦当中央には「三枚笹」、「梅花」、「三引両」の文様が配されているものである。唐草の状態は、その末端が上方へ巻き上げられているもので、「三枚笹」「梅花」を中央にもつものの唐草は飛雲形を呈し、「三引両」を配するものは渦状の隆線で表現されている。

「三枚笹」文をもつものをⅠ類とする。これは中央花卉の文様並びに唐草文の状況により3タイプに分類される。Ⅰ類—1：飛雲形唐草の末端が丸くなり、「三枚笹」の各葉がはっきりしているもの。Ⅰ類—2：飛雲形唐草の末端は丸いが、「三枚笹」の各葉がⅠ類—1ほどはっきりせず、若干凶案化されたもの。Ⅰ類—3：飛雲形唐草の末端が細くおさめられており、「三枚笹」がⅠ類—2以上に凶案化されている。

「梅花」文の花弁をもつものをⅡ類とする。1点のみの出土でタイプ分けは不可能である。唐草文の状況はⅠ類—3と類似する。

「三引両」文を中央に配するものをⅢ類とする。2片だけしか出土していないのでタイプ分けは不可能である。唐草文は1本の隆線で描かれている。

これらの分類にはっきり入れられるものは1、2点であるので、層位的な出土傾向はつかめなかった。

〔軒丸瓦〕全て「三引両」文のものである。瓦当面が完形なものはなく、寸法は不明であるが、残片から径を推定すると、14cm、16.4cm、17.2cm、17.8cmとなり、推定値に誤差があるにしても約4cmの径差があるものである。出土地点、層位をみても、径の大小で一傾向は指摘できず、時期的なことよりも、惣門中の使用部位による差と捉えたい。

出土片からは判別できなかったが、軒先以外に使用されたものもある可能性もある。

〔刻印瓦〕丸瓦尻部凸面に「安三、平瓦の尻部(?)に「㊦」、「化」と押されているものが各1点、計3点出土している。瓦工人の屋号と考えられる。

〔その他の本葺瓦〕棟の部分に使用したと考えられる瓦がある。鬼瓦、伏間瓦、棟込瓦(輪違い)、不明なものである。

鬼瓦は中央に「三引両」文が付されているものであるが、破片であるので全体の形態は不明である。伏間瓦は角棧伏間瓦片と鳥伏間瓦片と思われ、鳥伏間の鳥体部分と思われるところの文様は「三引両」文である。

〔棧瓦〕棧瓦は軒先にくる軒棧瓦片1点で、軒平瓦I類-3の唐草末端と類似するものであるが、中央花卉は不明である。また小巴もはずれており、その文様も不明である。表土中出土のものであり、屋根解体時の1片が混入したものであろう。

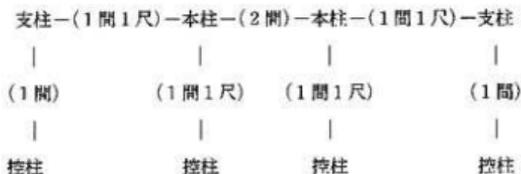
(2) 陶磁器 全点攪乱層からの出土で、しかも小破片であるが、若干、18世紀中頃かと思える唐津、伊万里の破片が含まれている。

(3) 金属製品 鉄製と鋼製の釘がある。鉄製のもは、長さ約5cmから約29cmのもので、鋼製のもは約3cmのものである。鋼製のもは2点しか出土していないが、飾り金具等の押えに使用したものと考えられる。

6. まとめ

以上の調査結果は次のようにまとめられる。

- ①惣門の建つ平場は、中世の館の腰部であったのか、惣門創建の時に造成したのかは不明であるが、惣門の部分は積土で形成されている。
- ②惣門の本柱だけに礎石を使用し、その他の支柱、控柱とも掘立柱となっていた(創建期)。
- ③本柱(礎石)は創建期から動いていないと考えられる。
- ④支柱は当初、掘立柱となっていたが、次には地覆石の上に建てられたものと考えられる。
- ⑤本柱及び支柱の控柱は創建以来掘立柱で、何回か建て直されている。
- ⑥柱間は芯々間という、次のようであったと考えられる。



- ⑦惣門背面も一段と低い塼のようなものがあつたと考えられる。
- ⑧惣門の屋根は本葺で、軒丸、鬼瓦などの文様は当初から「三引両」文であつた。

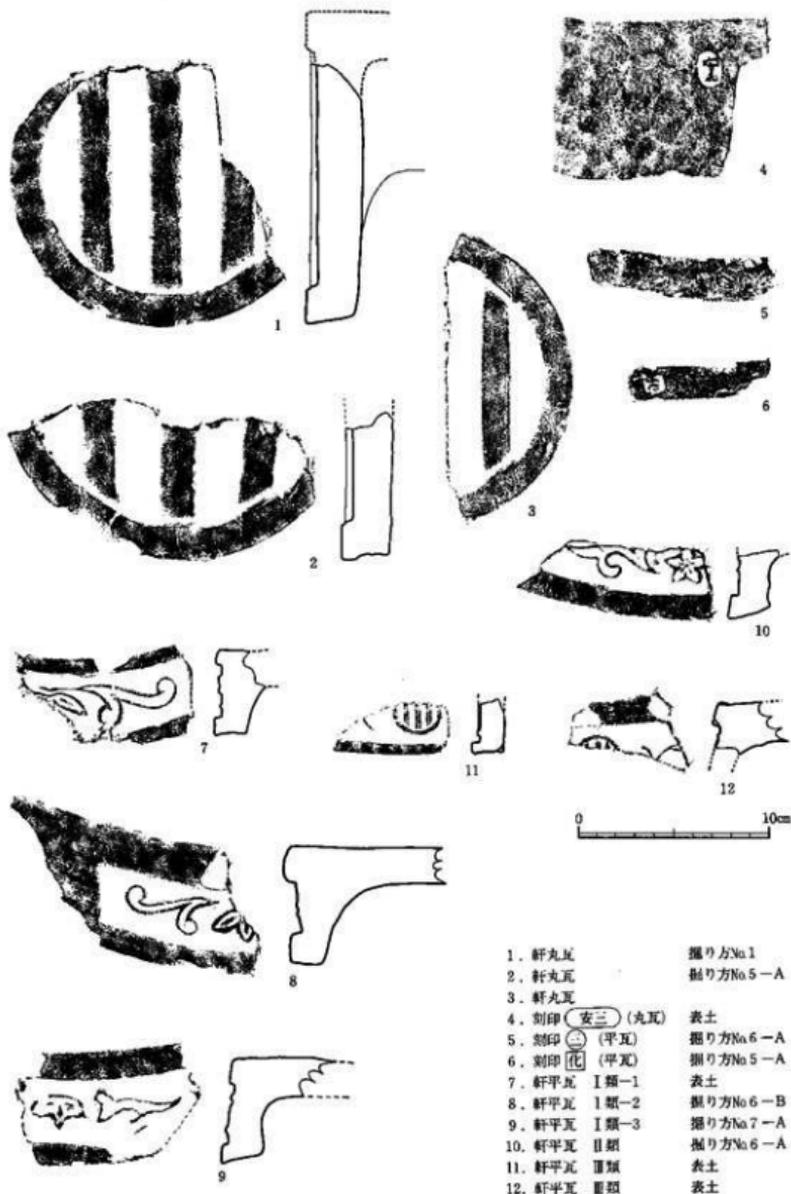
⑨出土遺物から創建年代を知ることはできないが、混入していた陶磁器の点数は18世紀中葉と推定できるものである。

以上のような調査結果を得るに至ったが、惣門の全様を推察するには惣門の周辺の調査も必要である。今後調査の機会があれば、特に背面（北側）の調査に興味をもたれるところである。それは、控柱（掘立柱）とその背面から流入する雨水の遮断をどのようにしていたかということである。本文中の掘り方No.6、No.7及びまとめ⑦で述べたことが、その時、検証されるものと思われる。

ところで、この調査結果も参考として惣門の修復がなされることと思うが、解体材で利用できる材を極力使用すること、今後の惣門の安全性を確保するなど建築上の問題もあり、考古学上の数値と修復結果が完全に一致するとは考えにくい。 (結城慎一・渡辺 誠)

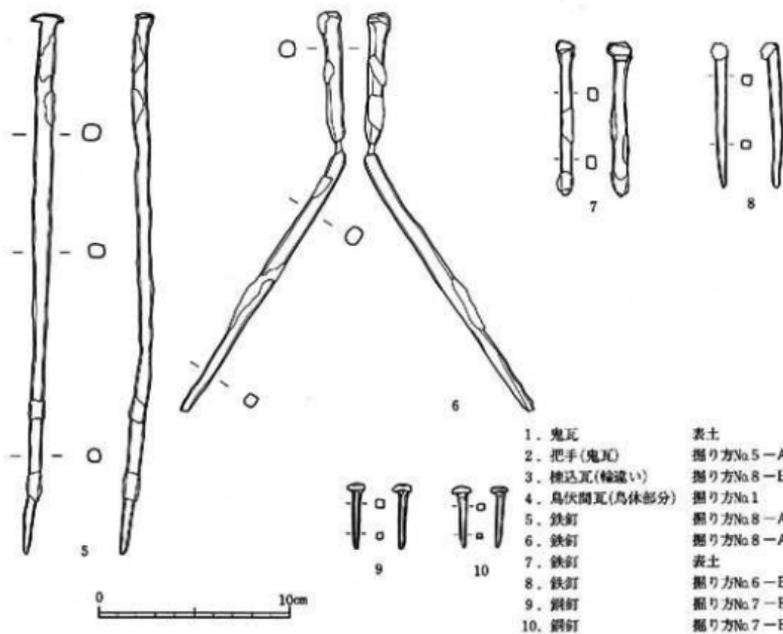
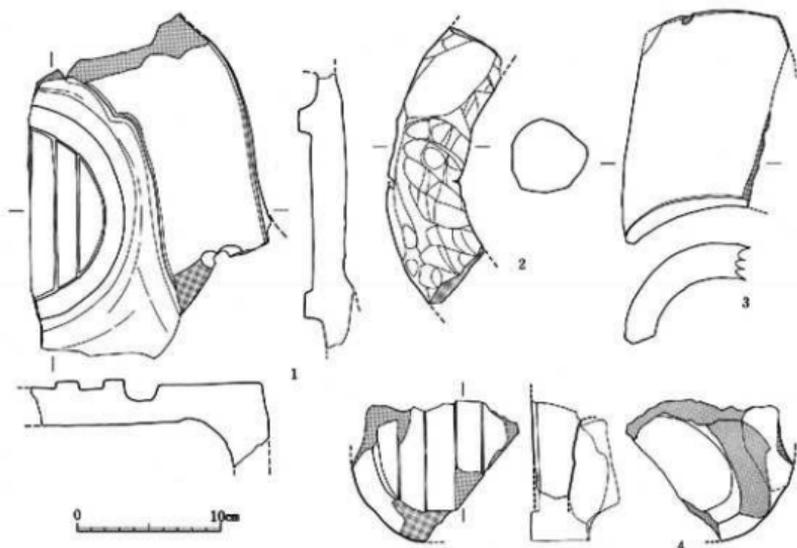
註・参考文献

- 註1. 宝文堂「仙臺領古城書上」『仙臺叢書』第4巻P. 114 1971・10
註2. 紫桃正隆「仙台領内古城・館」第4巻P. 56～64 1974・7
註3. 宝文堂「青山公治家記録・後編・卷之七十九」『伊達治家記録十九』P. 155 1880・7
註4. 宝文堂「青山公治家記録・後編・卷之八十一」『伊達治家記録十九』P. 261 1980・7
註5. 宝文堂「青山公治家記録・後編・卷之八十三」『伊達治家記録十九』P. 325 1980・7
註6. 宝文堂「青山公治家記録・後編・卷之百十二」『伊達治家記録二十』P. 356 1982・5
註7. 註6に同じ。P. 377
註8. 小倉 強氏によれば、大年寺門とされる小さい棟門が、現在、多賀城市南宮の慈雲寺に移築されている。「増補・宮城の古建築」P. 209 1977・11
註9. 佐藤 巧「大年寺惣門調査」1984・3
註10. 坪井利弘「日本の瓦屋根」(理工学社・1980)を参考とした。



- | | |
|--------------|-----------|
| 1. 軒丸瓦 | 掘り方No.1 |
| 2. 軒丸瓦 | 掘り方No.5-A |
| 3. 軒丸瓦 | |
| 4. 刻印 (丸瓦) | 表土 |
| 5. 刻印 (平瓦) | 掘り方No.6-A |
| 6. 刻印 (平瓦) | 掘り方No.5-A |
| 7. 軒平瓦 I類-1 | 表土 |
| 8. 軒平瓦 I類-2 | 掘り方No.6-B |
| 9. 軒平瓦 I類-3 | 掘り方No.7-A |
| 10. 軒平瓦 II類 | 掘り方No.6-A |
| 11. 軒平瓦 III類 | 表土 |
| 12. 軒平瓦 III類 | 表土 |

第20図 出土遺物実測図 I



- | | |
|---------------|-----------|
| 1. 鬼瓦 | 表土 |
| 2. 把手(鬼瓦) | 掘り方No.5-A |
| 3. 棟瓦(輪縁い) | 掘り方No.8-B |
| 4. 鳥伏間瓦(鳥体部分) | 掘り方No.1 |
| 5. 鉄釘 | 掘り方No.8-A |
| 6. 鉄釘 | 掘り方No.8-A |
| 7. 鉄釘 | 表土 |
| 8. 鉄釘 | 掘り方No.6-B |
| 9. 銅釘 | 掘り方No.7-B |
| 10. 銅釘 | 掘り方No.7-B |

第21図 出土遺物実測図Ⅱ



図版19 調査区全景（北東より）



図版20 調査区全景（南西より）

図版21 掘り方No. 3断面（北西より）





図版22 掘り方No. 6
(北西より)



図版23 掘り方No. 7
(北西より)



図版24 調査区西側
間知石列
(南東より)

図版25 調査区東側
間知石列
(南東より)



1. 平 瓦 タイプ1 (No.6-B) 6. 丸 瓦 タイプ2 (No.1) 11. 軒平瓦目録(表土) 16. 釘 瓦(表土) 21. 丸 瓦(表土) 26. 把手(東記)(No.5-A)
 2. 平 瓦 タイプ2 (No.5-A) 7. 軒平瓦I類-1 (No.6-B) 12. 軒平瓦目録(表土) 17. 釘 瓦(No.5-A) 22. 瓦磁器 27. 鉄釘 (表土)
 3. 平 瓦 タイプ3 (No.6-A) 8. 軒平瓦I類-3 (No.7-A) 13. 軒平瓦(No.6-B) 18. 釘 瓦(No.6-A) 23. 瓦磁器 28. 板釘 (No.7-B)
 4. 丸 瓦 タイプ1 (No.8-B) 9. 軒平瓦I類-2 (表土) 14. 軒丸瓦(No.1) 19. 瓦(裏瓦)(No.1) 24. 瓦磁器 29. 鉄釘 (No.8-A)
 5. 丸 瓦 タイプ2 (No.5-A) 10. 軒平瓦目録 (No.6-A) 15. 軒丸瓦(No.5-A) 20. 棒 瓦(No.8-B) 25. 瓦磁器 30. 鉄釘 (No.8-A)

図版26 出土遺物

〔5〕陸奥国分尼寺跡

1. 遺跡の位置と環境

陸奥国分尼寺跡（仙台市文化財登録番号C-420）は、国鉄仙台駅の東南東約2.5km、仙台市白萩町、宮千代一丁目にある（第1図）。本遺跡は、名取川の支流、広瀬川が形成した河岸段丘中の下町段丘縁辺部に位置し、「宮城野海岸平野」^(註1)を構成する「霞ノ目低地」^(註2)最奥部の自然堤防上に立地する。標高は11m前後である。

周辺の遺跡には、西方約600mに陸奥国分寺跡がある他、北方約3kmには本遺跡及び陸奥国分寺跡に瓦を供給していた台原・小田原窯跡群がある。また、南方には遠見塚古墳、法領塚古墳（古墳時代）、南小泉遺跡（弥生時代～近世）、若林城跡（古墳・平安・中・近世）などがある。

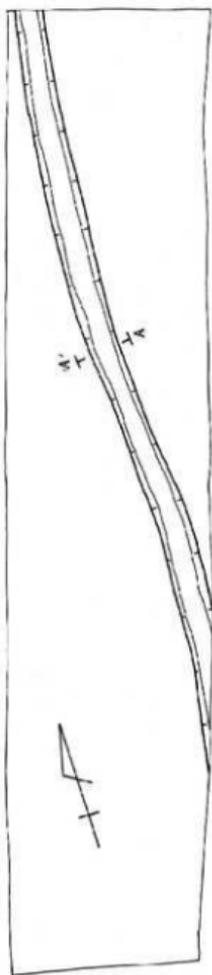
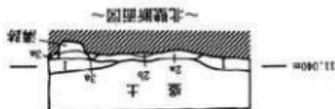
今回の調査地点は、史跡指定地の南約13m、仙台市白萩町309に位置する（第22図）。

2. 調査に至る経過

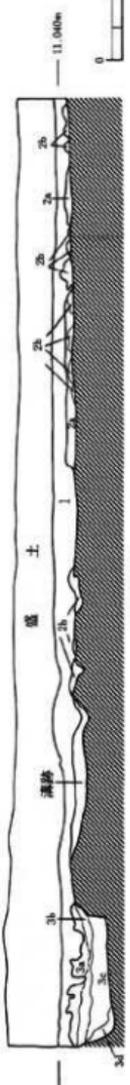
本遺跡は、古くから現在の曹洞宗国分尼寺内とその周辺に古瓦が散布していたこと、礎石の残る観音塚があったことなどから、陸奥国分尼寺跡であるとされていた。^(註3)昭和23年12月に観音



第22図 調査区位置図



調査区平面図



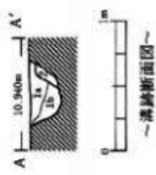
東壁断面図

溝跡堆積土

層位	土色	土性	備考
1a	10Y R 5% 黒褐色	シルト	
1b	10Y R 5% 黒褐色	シルト	3a 層を形状に少混含む
2	10Y R 5% 明黄褐色	シルト	黒褐色シルトを混状に含む

基本層位土層柱記

層位	土色	土性	備考
1	10Y R 5% 黒褐色	シルト	旧遺土
2a	5Y R 5% 黒褐色	シルト	本相による堆積
2b	7.5Y R 5% 暗褐色	シルト	3層を多量に含む 本相による堆積
3a	10Y R 5% 黄褐色	シルト	本相による堆積
3b	10Y R 5% 暗黄褐色	シルト	しより通し
3c	10Y R 5% 黄褐色	シルト	しよりの極めて薄し
3d	10Y R 5% 黄褐色	シルト	しよりの極めて薄し、且1-5cmの層を多量に含む



溝跡断面図

第23図 調査区平面図・断面図

塚周辺が国指定史跡となったが、昭和30年代に入り無断現状変更行為により、指定地内には多くの家屋が林立する事態となった。このため、仙台市は昭和39年に観音塚を中心とした遺構確認調査を実施した。その結果、観音塚は金堂跡と推定され、昭和42年度には公有化、翌昭和43年には環境整備が行われた。

昭和39年以降の調査には、昭和43年12月の環境整備に伴う観音塚中央部分の調査がある。また、昭和51年には推定金堂跡東隣りの現状変更許可申請に伴う調査が実施されたが、陸奥国分尼寺跡に関連する遺構は検出されなかった。昨年度は、推定金堂跡西隣りの土地を仙台市が公有化したことに伴う調査が実施された。その結果、掘立柱建物跡あるいは礎石立ち建物の基礎事業の跡と考えられる遺構、瓦溜めを検出している⁽²⁴⁴⁾。今回の調査は、国分尼寺内北東部の幕城における遺構確認調査である。調査区は排土の関係上、東西3m×南北14.5mとし、昭和60年11月19日より調査を開始した。

3. 基本層位

調査地点は昭和50年以前まで杉林となっていた個所で、その後幕城の整備に伴い盛土が行われている。基本層位は、盛土層を除き3層確認された。第1層は盛土以前の旧表土である。第2層は黒褐色系のシルト層、第3層は地山で、黄褐色系のシルト層である。尚、第2層・第3層上面は木根による攪乱が著しい。

4. 発見遺構

第3層上面で溝跡1条を検出した。方向はN-0°~10°-W、上端幅40~50cm、下端幅20~30cm、深さ10~26cmを計る。断面形は「U」字形を呈する。底面には木根による凹凸があり、一部地山中の礫層も露出している。堆積土は2層で、黒褐色と黄褐色のシルト層から成る。

5. 出土遺物

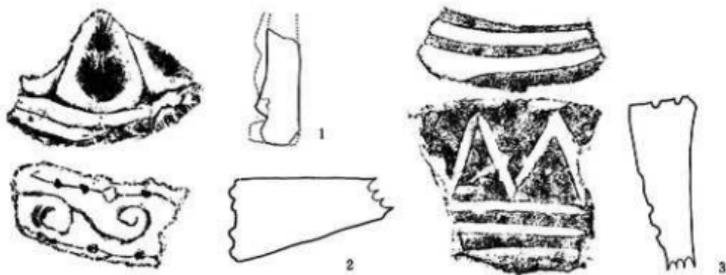
出土遺物は瓦類が最も多い。その他に土師器片、須恵器片、素焼き土器片が出土しているが、いずれも小破片で、図化したものは1点もない。

〔瓦〕 出土した瓦類は77点を数えるが、大半は小破片である。文様瓦には重弁連華文軒丸片(第24図-1)1点、偏行唐草文軒平瓦片(第24図-2)1点、重弧文軒平瓦片(第24図-3)1点がある。その他に丸瓦片、平瓦片があるが、いずれも小破片で図化したものは1点もない。

6. まとめ

今回の調査で検出した遺構は、溝跡1条のみである。溝跡は、方向と出土遺物から、陸奥国分尼寺跡に伴う遺構とも考えられるが、その性格は不明である。

本遺跡内は宅地化が進み、年々発掘調査の実施は困難な状況下にある。このため、陸奥国分尼寺跡の伽藍配置はもとより、寺域範囲も明らかになっていない。これらを、来年度以降の課題と捉え、計画的に調査を進めていく必要がある。(渡辺 誠)

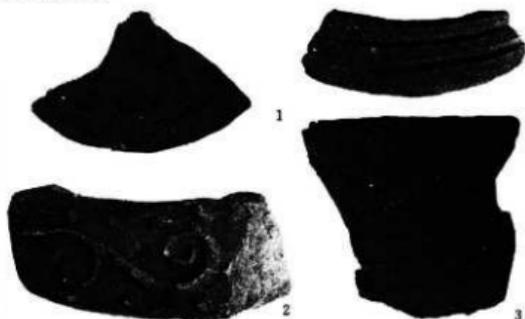


番号	登録番号	種類	出土遺構	層位	遺物	数量	写真図版
1	F-1	重弁蓮華文	旧赤土中		凸	1	図版28-1
2	G-1	偏行唐草文	1号溝	層位上	凸	1	図版28-2
3	G-2	重弧文	3号上溝		凸	1	図版28-3

第24図 出土遺物実測図



図版27 調査区全景
(南より)



図版28 出土遺物

1. 重弁蓮華文軒丸瓦
2. 偏行唐草文軒平瓦
3. 重弧文軒平瓦



図版29 溝跡断面
(北より)

陸奥国分寺跡・国分尼寺跡周辺の地割と寺域推定について

国分寺・国分尼寺周辺は昭和10年代から住宅化が進み、近年、県道荒浜・原町線、川内・南小泉線の整備に伴い、著しく状況が変化している。特に国分尼寺は国史跡指定地の北側を県道が蛇行しながら東西に走り、古代の遺構が殆んど観察不可能である。尼寺の寺域についても松本源吉・内藤政恒両氏によれば、現在の国分尼寺境内の北半部から境内北方に亘って南面して^(註6)おり、その広がりは一町半から二町位と考えられた。また、伊東信雄氏によれば、陸奥国分寺の寺地は発掘以前は二町四方と考えられていたが、発掘によって八百尺四方とするのが妥当となったために、国分尼寺の寺地もそれに伴って国分寺の寺地の半分の四百尺四方とされた。また、寺地の中心を、国分寺の寺地の中心の真東にとっている。その後、昭和39年、国分尼寺の発掘調査が、伊東信雄氏を担当者とし、仙台市教育委員会が主体となって実施された。国分尼寺の調査報告書によれば、従来より観音塚とよばれていた部分には南面する礎石建の5間×4間^(註8)の建物跡が確認され、これを国分尼寺の金堂と考えられるとしている。また、国分寺と国分尼寺の位置関係については、伽藍中軸線は真北から西5°ほどの片寄りと同様と仮定し、伽藍中軸線の距離はほぼ5町としている。さらに国分尼寺の寺地については、方400尺が最大限であり、これを超えることはないとしている。

ここではこれまで考古学の成果をふまえ、次の2つの資料をもとに国分寺・国分尼寺の寺域推定および周辺部の地割線の推定を試みた。

(1) 大日本帝國陸地測量部「原町」「仙臺南部」1/20,000 明治38年測図

(2) 航空写真「仙台市No.68」1/15,000 昭和32年10月12日撮影

資料の観察にあたっては、①水路・堀割、②街路・小路、③土地境界・行政区界の3点に主眼をおき、真北方向をとるもの、国分寺伽藍中軸線のN-5°-Wをとるもの、および計画的配置をとったと考えられるものについて、原則として古い年代の資料から順に新しい資料に移していく過程をとった。その結果、この地区には古代から近世にかけての地割線がみとめられ、次の3つに分類されるものと考えられる。

1. 桑里跡 基準方向 N-0°-S (真北)

県道荒井荒町線の北側で、西は南小泉小学校から東は南小泉生協付近までの一本杉町、大和町1・2・3丁目、中倉1・2丁目にみられる。

2. 近世街路 基準方向 N-2°-W (薬師堂と仁王門を結ぶ軸線)

控木通り、仁王門南進道路、国分寺南西地内小路、東街道(一部)、国分尼寺前で、主に国分寺の南西から南部にかけてみられる。

3. 国分寺・国分尼寺の地割跡 N-5°-W

国分寺の寺域は方800尺（242m 四方）と考えられ、東西南の3辺については発掘調査によって寺域を画する遺構が発見されているが、なお北辺は未確認であった。(1)の資料によれば、控木通りから北に470m 程の地区に伽藍中軸線と直交する東西方向の土地境界があり、これが明治40年当時に仙台市と旧宮城郡七郷村との郡界になっている。この郡界はあたかも国分寺の北側を囲む様に「冂」形にみられ、東西幅は260m 程とみられる。この郡界線を現況地形図に移すと現在確認される国分寺南辺よりほぼ300m（1,000尺）の位置にあたり、方向性からみて古代の地割をとどめる線と考えられる。この北300mの線は(2)の航空写真においても畑地、宅地の境界として明瞭に観察される。

国分寺周囲には金堂跡とされる観音塚を中心に南西北を「冂」形にとり囲む様に道路がみられ南と西の道路は山原町と旧七郷村との町村界にもなっている。東側はいずれの資料からも推定線が読み取れないが、観音塚を通る仮想中軸線で折り返すと、東西幅はほぼ180~190m（約600尺）、南北長は240~250m（約800尺）の地割が想定されよう。

この地割線の推定にあたっては縮尺率の異なる中縮尺図・写真を使用したことから精度にやや難がある。紙幅の都合で、検討過程を詳細に記せなかったが、今後の検討課題も数多く残され、寺域占地と条里との関係を含めて、さらに検討する必要がある。また、一方、推定線を発掘調査によって実証していくことも都市化著しい本地区においては急務と考えられる。

（木村浩二）

註・参考文献

- 註1. 地学団体研究会「新版 仙台の地学・仙台支部編」1980
- 註2. 経済企画庁「地形・表層地質・土壌 仙台」1967
- 註3. 松本・内藤「陸奥国分寺」角田文衛編『国分寺の研究』1938
- 註4. 仙台市教育委員会「史跡陸奥国分寺跡環境整備並びに調査報告書」『仙台市文化財調査報告書第4集』1969・3
- 註5. 仙台市教育委員会「仙台平野の遺跡群Ⅱ～昭和59年度発掘調査報告書～」『仙台市文化財調査報告書第75集』1985・3
- 註6. 註3に同じ
- 註7. 伊東信雄編「陸奥国分寺跡」陸奥国分寺跡発掘調査委員会 1961・10
- 註8. 註4に同じ

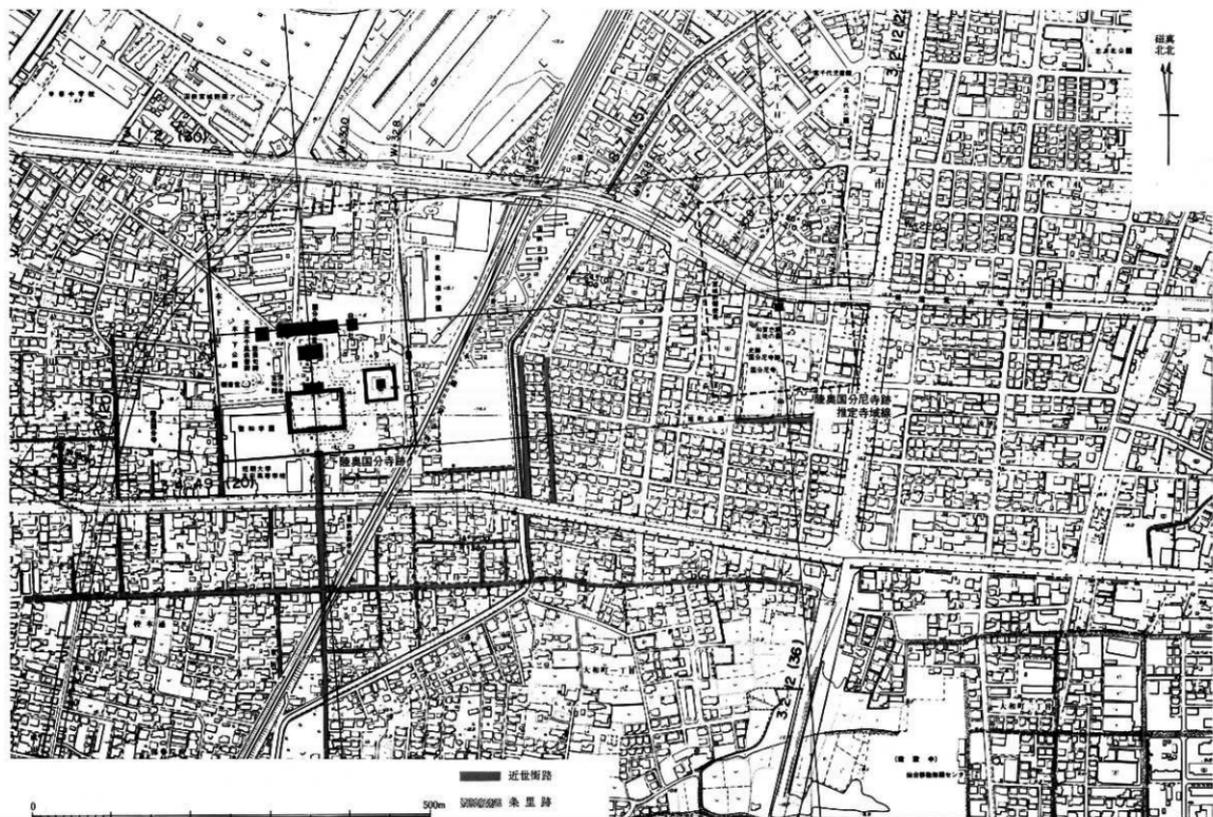


第25図 陸奥国分寺・国分尼寺周辺地形図

大日本帝國陸地測量部仙臺近傍九号「原町」「仙臺南部」1/20,000 明治40年



図版30 陸奥国分寺跡・国分尼寺跡航空写真（昭和32年撮影）



第26圖 陸奥國分寺・国分尼寺寺域推定圖

[6] 郡山遺跡

本遺跡にかかる調査は範囲確認調査として、本年度は1,500㎡程を予定しており、主にⅡ期官衙政庁の確認を目的としていた。この他に、遺跡内における一般住宅の新築・改築、上下水道整備に伴う事前調査が必要な場合、その都度、本事業の中で発掘調査を実施した。本年度はこれらの調査が7件であった。詳細については「郡山遺跡Ⅵ」に報告し、本書では概要にとどめる。

(1) 第50次調査：方四町Ⅱ期官衙の外郭北辺隣接地にあたり、遺構の存在が予想された地区である。この地区で店舗兼住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。深さ1m程で遺構検出面となったが、遺構・遺物とも発見されなかった。

(2) 第52次調査：方四町Ⅱ期官衙の南東外にあたり、外郭南東コーナーより約65m南に位置しており、Ⅱ期官衙外であるが、Ⅰ期官衙の広がり予想される地区である。この地区で住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。調査の結果、Ⅱ期官衙段階以前の竪穴住居跡の他、溝跡・土壌などが発見された。

(3) 第53次調査：方四町Ⅱ期官衙内で外郭南辺中央に隣接する地区である。この地区で住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。調査の結果、深さ1mの旧水田耕作土直下層で土壌・溝跡が発見された。

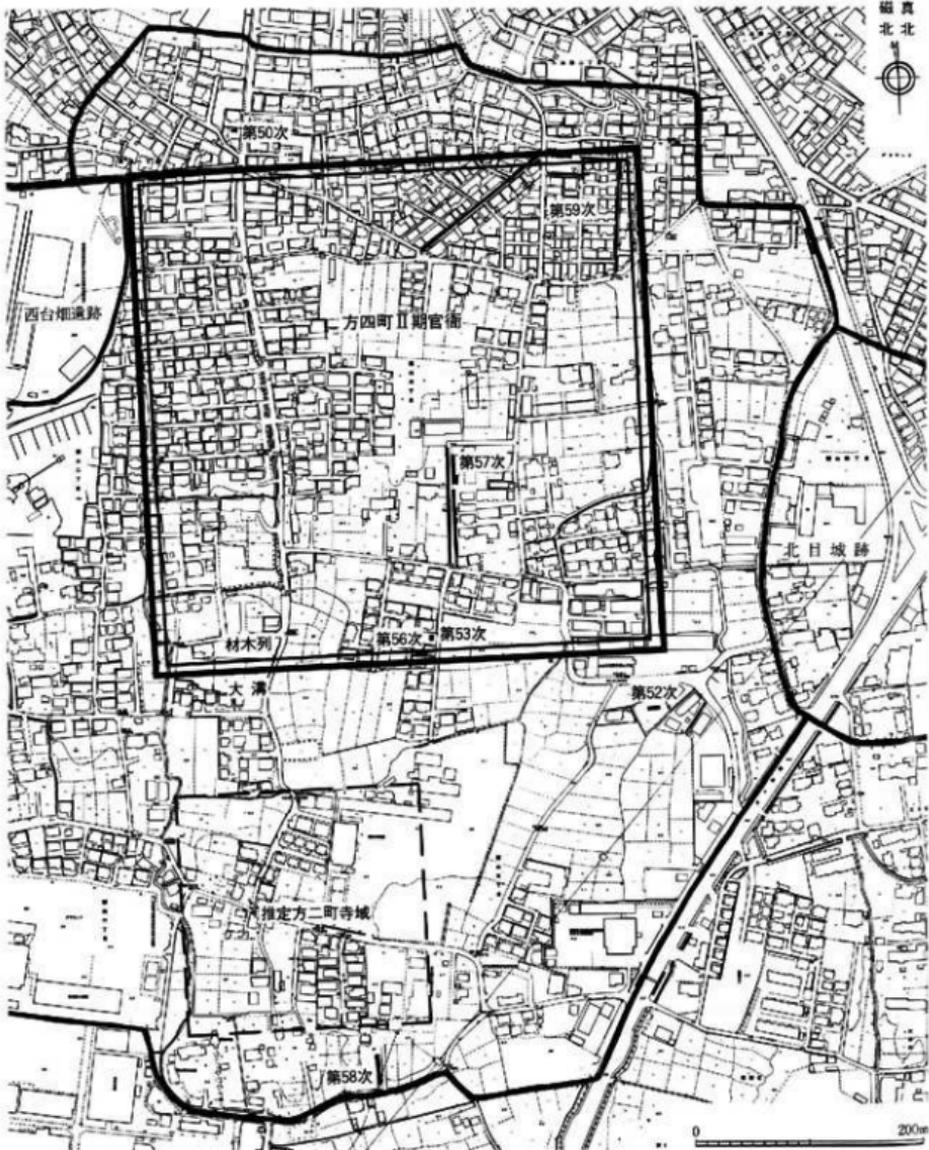
(4) 第56次調査：方四町Ⅱ期官衙外郭南辺中央部にあたり、材木列の存在が予想された。この地区で住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。調査の結果、深さ1.5mの旧水田面下層で、外郭南辺材木列と外郭南門の柱根が発見され、八脚門であることが判明した。

(5) 第57次調査：方四町Ⅱ期官衙推定政庁東辺部にあたり、政庁区画施設の存在が予想された地区である。この推定線に沿って、道路側溝布設に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。調査の結果、柱穴・材木列・溝跡が発見されたが、政庁東辺を確認することができなかった。

(6) 第58次調査：寺院推定域外南方に位置し、遺構の広がりが予想された地区である。この地区で小規模な宅地造成に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。調査の結果、柱穴・溝跡・土壌が発見されたが、寺院域の南限を確定するには至らなかった。

(7) 第59次調査：方四町Ⅱ期官衙外郭北辺東部地区に位置し、外郭その他の遺構が存在する地区である。この地区で水道本管埋設に伴う発掘届が提出されたことから、工事と並行して緊急調査を実施した。調査の結果、想定線上で外郭材木列を確認した他、竪穴住居跡・材木列・土壌などを発見した。

(木村浩二・長島榮一)



第27図 郡山遺跡調査区位置図

職 員 録

社会教育課		文化財調査係	
課長	阿部 速	係長	佐藤 隆
主幹	早坂春一	主事	結城慎一
		教諭	菅原和大
		主事	木村浩二
		〃	藤原信彦
		教諭	小野寺和幸
		〃	佐藤美智雄
		主事	佐藤 洋
		〃	金森安孝
		〃	佐藤甲二
		〃	吉岡恭平
		〃	工藤哲司
		主事	渡部弘美
		教諭	渡辺 誠
		主事	主浜光朗
		〃	斎野裕彦
		〃	長島榮一
		〃	及川 格
		教諭	千葉 仁
		〃	松本清一
		主事	高橋 泰
		〃	鈴木善弘
		派遣職員	高橋勝也

「仙台平野の遺跡群」発掘調査報告書刊行目録

- 第37集 仙台平野の遺跡群Ⅰ－昭和56年度発掘調査報告書－(昭和57年3月)
- 第47集 仙台平野の遺跡群Ⅱ－昭和57年度発掘調査報告書－(昭和58年3月)
- 第65集 仙台平野の遺跡群Ⅲ－昭和58年度発掘調査報告書－(昭和59年3月)
- 第75集 仙台平野の遺跡群Ⅳ－昭和59年度発掘調査報告書－(昭和60年3月)
- 第87集 仙台平野の遺跡群Ⅴ－昭和60年度発掘調査報告書－(昭和61年3月)

仙台市文化財調査報告書第87集

仙台平野の遺跡群V

昭和61年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社東北プリント

仙台市立野24-24 TEL 63-1166

